

人間の欲望にべっとりど染み
毎 非鳴、暗転、そして静赤
血が

怪談 都市伝説

This booklet
theme is ...
*Kai & an
d*

恐怖に言葉を
オカル

幽 おい、ちょっと待て
死に

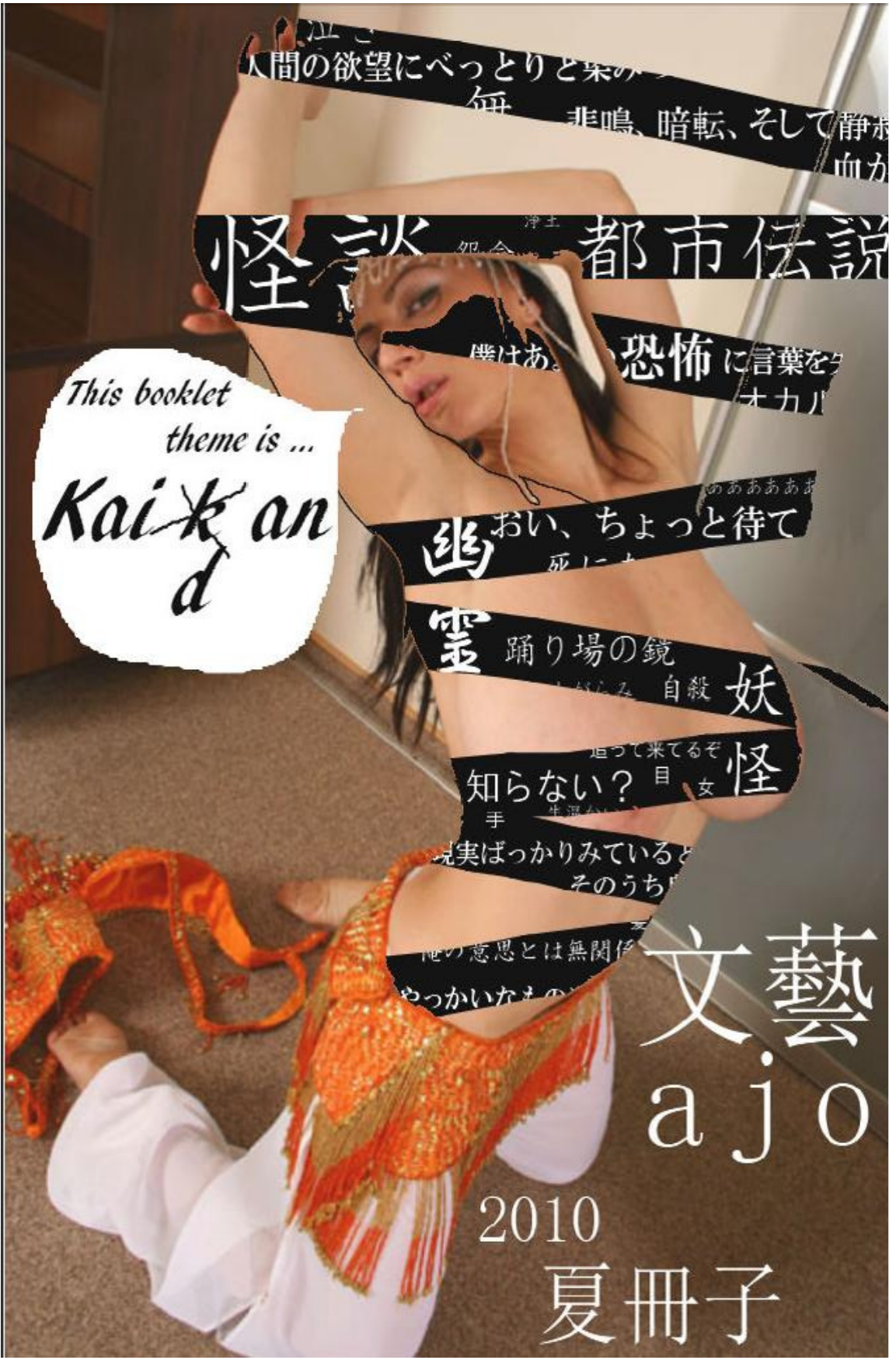
霊 踊り場の鏡
自殺 妖

知らない？ 目 女 怪

現実ばかりみていると
そのうち

文藝
a j o

2010
夏冊子



目次



P3

赤い手袋

霧島 都

P7 祭囃子の夜

依代 稔

P14 サヨナラオバケ

高橋 輝人

P18 等身大の自分

斉藤 和六

P22 バカは死んでも治らない

叶 仁六

P30 人生怪談

Basulu



赤い手袋

霧島 都

——ある夜のこと。

どんよりと暗い空から、絶えず雪が降っていた。

僕は橋の上で朝から降り続くそれを幸せな気持ちで見ている。

レンガ造りの家が並ぶこの街に、白い雪はよく似合う。

街の風景は一日中見ていたのに飽きることがなかった。少しづつ明りの灯る家々も、ガス灯に照らされてひらひらと淡い光を放つ雪の粒も、行き交う人々でさえも、僕の目にはこの街の魅力として映っていた。

こんな気持ちになるこの街は最高だ。特に冬は魅力が倍增する。それだけこの街には雪が似合う。

僕はそっと目をつむった。耳を澄ますと、雪の降る音が聞こえそうなくらい静かなことがわかる。その静けさは夜だけのもので、僕は改めて心地よく感じた。

時が流れるのも忘れてそうしていると、積もった雪を踏みしめていくらしい足音が聞こえてきた。

目を開くと、黒のロングコートに、黒い帽子を深くかぶった男が歩いているのが見えた。やたらと身長が高い上に真っ黒な格好をしているせいで、かなり不気味に見える。左手で持っている鞆も、雪の中から出たり入ったりする靴までもが真っ黒だ。

「君、ちよつといいかね？」

まじまじと見ていたら、驚いたことに男は僕の前で立ち止まった。

「僕のことですか？」

「ああ、実は一つ、頼みたいことがあるんだ」

男の声は老人のように低くしわがれていた。それは背の高さから若い男をイメージしていた僕を驚かせた。声の出所はこれまた黒マフラ

ーで完全に隠されていて、それにもかかわらずはつきりと耳に残って、すごく不思議な感じがした。

ただ、こんなにも近くにいるのに男の顔はよく見えず、外見的にはマフラと帽子に覆われているということしかわからなかった。

「……僕に頼みですか？」

「そうなんだが、嫌かね？」

「いえ、嫌というわけじゃないんです。ちよつと驚いてしまっただけで」

男の情けないくらい遠慮がちな声を聞いて、僕はあわてて首を振った。正直言つて、いきなり頼みごとと言いだすのはどうかかと思つた。顔も名前もわからない状態で頼みごと何もないと思うのが普通だと思つた。

それでも、僕の気持は内容がどうあれ男の頼みを聞こうという方に傾いていた。今日の気分のよさも手伝っていたのだと思つた。

「それで、どんな頼みなんですか？ 僕にできることならお手伝いしますけど」

「ほほ、頼まれてくれるか。それはありがたい。これまでは誰に頼んでもなかなか引き受けてもらえなくて困っていたんだ」

男は不気味に笑った。

「それで、頼みというのは探しものなんだが、手袋を探してほしいんだ」

「手袋？」

「そうなんだ。先日、ちよつとした不注意で自分のものを失くしてしまつてね。その代わりを探しているんだが、なかなかいいものが見つからなくてね」

「どんなものを探しているんですか？」

「ほほ、私はね、赤い手袋が好きなんだよ。見ていてドキドキするような赤い手袋を探しているんだ。今までに集めたものはどうも私に

合わなくてね」

「手袋がお好きなんです」

「合わないのは赤色のせいなんじゃないかと思っただけど、ここで男の気分を悪くする必要はない。」

「ああ、大好きなんだ」

「楽しんでる声で話す男に合せて笑いながら、僕は不思議に思っていた。たいしたことじゃないとは思っていたけれど、それにしても手袋を探さなくて……。」

「わざわざ初対面の人間に頼むほどのことなのかと疑問に思った。」

「見つかったら、お礼として私が今使っているものを君にプレゼントしよう。明日のこの時間に待っているから」

「そんな僕を気にも留めず、男は歩き出した。」

「あの」

「僕は何を考えるでもなく呼び止めた。男は振り返り、僕の言葉を待っている。」

「……あの……えつと……」

「もやもやした感じがうまく言葉にならない。そんな僕を見て、男は小さく笑った。」

「それともう一つ。もしも見つからなかつたら、君のものを持ってきてほしい。勝手なことを言つてすまないが、頼むよ」

「雪の中帰っていく男を見送ってから、僕はとりあえず手袋を探してみた。わざわざ人に頼むくらいなのだから、よほど特別なものを探しているのだろう。そう思つていくつかの店を回ってみた。でも、どの店にも別に特別な手袋があるわけではなく、ごく普通の手袋がさまざまな色に染まって並んでいるだけだった。」

「これくらいならわざわざ買う必要もない、家にあるもので十分だろうと思つて、とりあえず去年使つていたものを用意した。」

「日付が変わつて、机に置かれたそれを見ながら僕は少し後悔していた。まだもやもやとしたのが残つていて、せつなくいい気分だったのを害されたような気分になつていた。だったら引き受けるなという話だけど、それも気分の問題であつてどうしようもない。昨日は人の頼みを何でも受ける気分だつたというだけなのだ。」

「気分を切り替えて僕は新聞を開いた。」

「記事はたいして変わり映えのしないものばかりだつた。連日の雪についての記事があり、なかなか犯人の捕まらない殺人事件の記事があり、来週の大統領選の記事がある。」

「そのどれもを読むともなく読みながら、トーストにかじりついた。たつぷりと乗せたイチゴジャムがお皿に落ちて、なんだか不愉快な感じがした。」

「夜になって、僕はまた橋の上で雪を眺めていた。」

「雪は相変わらず降り続き、昨日のように僕を幸せな気持ちにする。手にかごを下げて歩く女の子がいる。母親に手を引かれて歩く男の子がいる。」

「見ていると優しい気持ちになる。目をつむると静かさに心地よくなる。」

「やっぱり、この街は最高だ。」

「しばらくそうしていると、昨日のように足音が近づいてきた。」

「やあ、待たせてしまったかね。これは失礼」

「男の恰好は昨日と全く変わらなかつた。相変わらず顔も見えない。」

「いえ、そんなに待つてませんから」

「ほほ、そうかそうか」

「僕が答えると、男は不気味に笑つて頷いた。」

「それで、手袋のことなんですけど……」

「おお、探してくれたかね？」

「すみません、一応探してみたんですけど、どうもしっくりくるものが見つからなくて。とりあえず去年買ったものを持ってきてみました。気に入るかはわかりませんが、どうですか？」

僕はポケットから手袋を出して男に差し出した。

「……ほほほ、なるほど、確かに赤い手袋だね。だが、私がほしいのはもつとドキドキするほど真つ赤な手袋なんだよ。これでは少し色が薄いようだ」

「僕もそうは思ったんですけどね。これくらいしか見つからなかったんです。すみません」

「ほほほ、気にする必要はない。現に、今君は両手に持っているじゃないか」

「……え？」

突然、男はよくわからないことを言った。手に持っているのは、赤い手袋。今さっきこれではダメだと言われた淡い赤色の手袋。

「これで、いいんですか？」

「ほほほ……」

男は僕が聞き返すのに答えず、ただ笑いながら近づいてきた。その姿の異様に、思わず後ずさる。

「せつかく手袋を探してきてくれたんだ。親切な君には特別に私が前に見つけたものをプレゼントしなくてはいけないね」

そう言って、男は左手に持っている黒い鞆を開けた。ぼとぼとと鞆から落ちた無数の何かが山を作った。

「……うっ」

それがなんなのか分かった瞬間、僕は思わず目をそらした。そして無様に尻もちをついた。あまりにも異様なそれは、無数の手首だった。

いくつあっただろうか？ とにかくものすごい数があつたように思う。「ほほほ、わかつたかな？ 君も両手に持っているだろうか？ どれも

きれいな赤で気に入ってるんだが、残念なことに私の手には合わないのだよ」

言いながら男はコートの右袖を捲くつた。そして、僕はまた絶句した。男には手首から先がなく、その下に一定のリズムで赤い雫を垂らしている。

男が何をしようとしているのか、そんなことは考える必要もなかった。

男はなんの躊躇もなく僕の手を奪うのだ。

「君の手袋は私に合うかな？ ほほほ、どちらにせよ大事に使わせてもらうよ」

逃げなければいけない。そう、思った。思っただけで、体は全く動かなかつた。恐怖に腰が抜け、体は小刻みに震えていた。口はバサバサに乾き、言葉を発することもできなかつた。

男がゆつくりと近づく。

左手には鞆から出てきた鎌が。

右手にはぼたぼたと滴る血が。

「失礼」

男の声がして、『ぼとり』と音がした。やけに間の抜けた音だった。続いて鎌は流れ作業のように僕の胸を裂き、やがて男は遠ざかつた。

『連続殺人事件の続報』

昨夜、新たに右手だけ切り落とされた男性の遺体が発見された。

遺体の脇には、先日までの被害者のものと思われる無数の右手山積みされていた。

犯人の意図は不明、手掛かりはまったたくなく、さらなる被害が懸念される』

「——お母さん。僕、手袋ほしいな。あそこに落ちてる赤いやつ
みたいなのがいい」
雪が降り続く中、無邪気な子供が母親に言ったのはそれから数日後
のことだ。

男は病を患っていた。死に至る病である。余命はいくばくも無い。その事実を知った時、男が最初に感じたのは、激しい憤りの念であった。

なぜ、俺が死ななければならぬのだ。この世には、死に値する人間が、他にいくらでもいるではないか。

だが、その衝動が男をとらえていたのは、ごく短い間であった。迫りくる死の恐怖が、次第に男をさいなむようになったのだ。それは夜の帳が下りていくように、静かに、しかし確実に、男の心の内に垂れこめていく。

男に許されたあがきは、酒に溺れることだけであった。病身にとつて毒にしかない酒こそが、男の気を紛らわす唯一の手だてなのだった。男は毎晩のように毒をあおった。

そして、その限られた命を、自ら削り続けたのである。

男はいつからか、毎晩のように故郷の夢を見るようになっていた。それは決まって、幼かったころの男が、たたなづく山々を見上げているところから始まる。その中でひとときわ高い山の真ん中辺りには、年月を経た古刹が建てられていた。

この寺へ行くためには、長い長い石段を昇らなければならない。

幼かったころの男は、いつも一段飛ばしで、苔むしたその石段を駆け上がった。息を弾ませながら石段を昇りきると、その境内には必ず、一人の和尚がいた。幼い子どもが来たと気付くと、和尚はわざわざ竹ぼうきを動かす手を止めて、また来たのかい坊や、といつも穏やかに微笑みかけてくれる。

この和尚から怪談話を聞くこと。

それが幼かったころの男にとって何よりの楽しみであった。

もつとも、今やその内容は全く思い出せない。ただ、和尚の口から語られる一言一言が、幼かったころの男の小さな心を揺り動かしたのだけは確かである。

和尚の怪談話を聞いている間は、男も安心して夢を見ていられるのだ。

もつと話してくれ、と駄々をこねる幼い子どもに、和尚はいつも優しくこう諭す。もうじき日も暮れるのだから、ご両親が心配します。

今日はこれまでにして、早く帰りなさい、と。

幼かったころの男は、渋々と首を縦に振った。黄昏に染められた石段をとぼとぼと家路につく。木々にへばりついたヒグラシがわんわんと鳴き声を響かせ、辺りはひどくやかましい。

ふもとに降りるころには、熟れ過ぎた果実のような夕陽によって、村が黒い影の底に沈んでいるように見えた。

その時、不意に幼い子どもの心と言いきれない恐怖が襲った。冷水をあびせられたように震えあがり、思わず駆け出すにはいられない。

早く、早くお父さんとお母さんのところに帰ろう。

そう思い立ち、幼かったころの男は必死に両足を動かした。だがどうしたとか、いっこうに家に帰ることができないのだ。

ヒグラシはいつのまにか鳴きやんでいた。闇夜のような沈黙が、村の家並みを覆い尽くしている。

男は駆けた。死に物狂いで駆けた。

だがしかし、男は父母の姿を見ることはおろか、声を聞くことすらできないのだ。

黒い影の底をさ迷い歩かうちに、男は目を覚ます。そして幻影のような夢を振りかえり、必死に両親の面影をまさぐろうとするのであった。

ある雨の降る晩。

男は大量の毒をおおった。

そのためだろうか。その日は普段以上に身体が重く感じられた。まるで何かを負ふさつているかのようだ。

ついに耐えきれなくなり、男は道端に座り込んだ。すると、その目は力なく閉じられてしまう。

じつとりと湿った霧雨が、男の体から血潮の熱を奪っていった。

まどろむ意識の中で、男はぼんやりと考える。

俺はこのまま、死ぬのだろうか……。

いつもなら身の毛もよだつような恐怖が、男の心を襲ったことだろう。だがやはり、なぜかその日に限って、男は落ち着きを保っていたのだ。

仕方がないのかもしれないな。俺だって、充分過ぎるぐらい、死に値する人間なんだから……。

そして、男が夜の帳の向こう側に行こうとした。その時、

祭囃子が、聞こえはじめた。

男の生気のない目が、ゆつくりと開かれていく。だが、その視界には何も映りはしない。

笛の音。鉦の音。そして、鼓の響き――。

すでに男の中には、祭囃子以外のいかなるものも存在しなかった。力強く、そして軽妙なお囃子の鼓。その音色は男の内に響き渡り、

その身に再び血潮の熱を取り戻してくれる。

男はよろめきながらも立ちあがると、祭囃子の音を頼りに歩き始めた。

いったい、どこから聞こえてくるのだろうか？

世界は霧雨に隠されて、ひどくあいまいににじんでしまっている。ただ唯一、鮮やかに存在しているのは、この笛の音であり、鉦の音であり、そして鼓の響きだけなのだ。

男は一心不乱に、祭囃子の音色を追いかけ続けた。

気がつくくと、男は竹やぶの中を歩いていた。見知らぬところだった。

フツと行く先に目を向けると、そこにはずいぶんと場違いなものが吊り下げられている。

それは、蚊帳であった。

雨の降る真夜中の竹やぶに、蚊帳が吊り下げられているのだ。

それは実に奇妙な光景だった。だが、男にとつてそんなことは、どうでも良かった。

蚊帳の向こう側から響き渡る、祭囃子――。

男は何かに誘われるように、蚊帳の目前まで一直線に進むと、たぬらうことなく蚊帳をめくった。

故郷。

めくった蚊帳の向こう側には、故郷が広がっていたのだ。

たたなづく山々。その中でひとときわ高い山の真ん中辺りには、年月を経た古刹が建てられていた。そのふもとは静まり返った村の家並み。それらはみな、さやかな月の光によって分け隔てなく包みこまれている。

男はあまりのできごとに、驚くより先に呆然としてしまった。

どうして、俺は今、ここにいるのだろうか？

慌てて後ろを振り返ってみると、そこにあるはずの蚊帳がなくなっている。当然、竹やぶも消え失せて、男の視界にはただ、青々とした田んぼとあぜ道が続いているばかりだった。

しばらく後、男は自分を呼ぶ声で我に返った。見てみると、あぜ

道の向こうから誰かがゆっくりと進んでくる。まるで滑るようになめらかな歩き方だ。

やがてほんやりと、人の形をした影が浮かんできた。そして影は、また男の名前を呼ぶ。

その姿をあらためた瞬間、男は思わず驚きの声をあげてしまった。不可思議なほど明るい月光に照らされている影は、まきれもなく和尚なのである。幼かったころの男に、怪談話を聞かせてくれた、あの和尚だ。

和尚は男に微笑みかけてくれた。それは夢の中と同じ、穏やかな笑顔。男が何度となく見続けた、優しい微笑みであった。

その笑顔を見たたん、男は自分の置かれている奇怪な状況を、すっかり忘れてしまった。

それほどにあたたかく、懐かしい和尚との再会であった。

ひさしぶりだね、と和尚はのんびり言った。それを皮切りに、何十年もの空白など始めから無かったかのように、二人は長い間語り合った。

そのうち和尚が、ぜひとも寺に来なさい、と男を招いた。

男としては、これほどありがたい話はない。喜び勇んで承諾すると、二人は連れ立って苔むした石段を昇って行った。

夜空には真つ青な満月が、二つ浮かんでいる……。

それから男は、和尚に怪談話をするようにせがんだ。

和尚は快く応じてくれる。そして一言一言、大切なものを扱うように、怪談話を語り始めた。男は何十年ぶりにか童心にかえり、次々と紡がれていく和尚の言葉を夢中で聞き続ける。

和尚の語る怪談話は、なぜか、みな狸にまつわるものであった。

夜中に竹を切るような音を立てる狸。

布を叩くような音を立てる狸。

石ころを人にぶつける狸。

影のような姿に変身し、かわらけの欠片をまく狸。
人にとり憑いてしまう狸。

大きな衝立に化けて道をふさいでしまう狸。
のっぺらぼうに化けて人を驚かす狸。

仏様に化けて坊さんを食、べてしまおうとした狸。
汽車に化けて本物の汽車に突進し、運転手を驚かす狸。

男にとってはどれもこれも懐かしい話であった。それらは男の記憶の底に、確かに残っていた。幼かったころの小さな心を揺り動かしたのは、これらの狸の怪談話に間違いなかった。

ひと通りの話を聞き、男は満ち足りた心地になった。こんなに楽しかったのは、いつ以来だろうか。

男が心の底から礼を述べる。すると和尚は、こんなに遅くまで引きとめて申し訳ない、と丁寧に謝った。そしてさらに、言葉を紡ぐ。

早くご両親のもとへ帰りなさい、と。

和尚の言葉に、男ははつきりとうなずいた。

そう言えば、父にも母にもずいぶんと会っていない。そろそろ、顔を見せるぐらいしてもいいだろう。

男は和尚に別れを告げる。それに応える和尚のほほ笑みは、どこかさびしげであった。

男は苔むした石段を下りていく。

ヒグラシは鳴いていない。玉を転がすような鈴虫の鳴き声だけが、月夜の晩に唯一の響きを与えている。ふもとの村は二つの月によって銀のような輝きを帯びていた。

男は両足を動かした。スタスタと落ち着いた足取りで歩いていく。

そして男は、あっさりと両親の待つ家にとどり着いた。
幼かったころの男が住んでいた時のまま、懐かしい家は静かにたたずんでいる。

玄関の引き戸に手をかけた。

この戸を開ければ、久しぶりに両親と会える。それを思うと、男は胸にあたたかな感情があふれてくるのを感じた。

男はゆつくりと、戸を開いていった。そして――

コンクリートがむき出しになっている廊下を、刑事はくたびれた様子で歩いていく。小わきには目を見張るほど大量の書類を抱え込んでいた。

警察署の中はやけにざわついている。あちらこちらに動き回り、口々に何かを言い交す警官たち。しかし、その様子からは緊迫感よりもむしろ、戸惑いの感情を見て取ることができた。

やがてある部屋の前で、刑事は立ち止まった。頭を振り、疲れを振り払うと、扉をノックする。

「入れ」

中から刑事と同じようにくたびれた声が返ってくる。

「失礼します」

刑事は声を張り上げて、ドアノブを回し室内へ入っていった。

室内は雑然としていた。数台しかない机の上に、あふれんばかりに積み上げられている書類の山。事実、あふれてしまった書類が、床の上へ雷崩のように散乱しているありさまだ。

「おう、長野か」

部屋の一番奥で書類を読んでいた警部が、つとめて明るく顔をあげた。だがその顔は、刑事が抱える書類の束を見たとき、疲れ果てた面持ちへと変わってしまう。

刑事としても心苦しいのだが、仕事である以上はしかたがない。

「お疲れ様です、富山警部。また新しい通報が入りました」

「萩野市からか？」

刑事は首肯することによって答えた。それを見て、大きなため息をつく警部。

「俺も長いこと警察に勤めてきたが、こんな奇妙な事件は初めてだ」
「そう言えは、上層部がこの事件の正式名称を発表してましたよ」

警部は無言で先を促している。刑事はひとつ咳払いをしてから、こう言った。

「〔萩野市集団幻覚事件〕です」

事の発端は、六月二十五日、ある私鉄の最終電車で起こった。

終電は鉄の線路をきしませながら、霧雨の中を蛇のように這い進んでいた。運転手はその時、何となく不安を感じていたという。

何か良くないことが起こるのではないだろうか。

窓の外を狂ったように舞い踊る霧雨。それが運転手の心に不安な気持ちをもたせたのかもしれない。

危惧はやがて、現実のものとなる。

終電は萩野駅と宮部駅間の一直線に伸びる単線にさしかかった。

その時、突如として警笛が鳴り響いたのだ。闇夜を切り裂くように響くそれは、最終電車の前方から聞こえてくる。運転手はギョツとして、暗い夜が広がる前方に目を凝らした。

なぜ警笛が聞こえたのか。この電車は終電だ。他に電車が走っていないはずがない。そもそもここは単線、つまり一本道ではないか。すれ違ふスペースなんてありはしない……。

目まぐるしく右往左往する思考。運転手はひどく混乱していた。

それは突然現れた。

不意に暗がりの向こう側から、目を射るような光が放たれた。その

鋭い光を放つ二つの光源は、終電に向かって一直線に突進してくるのだ。まるで、獲物に襲い掛かる蛇のように――。

電車だ！

そう気付いた瞬間、運転手は必死の思いで急ブレーキをかけた。だが、謎の電車はライトをギラギラと光らせて、ものすごい勢いでこちらに向けて突進してくる。

もう、だめだ。

運転手は覚悟を決めた。だが、その瞬間はなかなか訪れない。おそろおそろ運転手が顔をあげた時、すでに謎の電車は消え失せ、窓の外を踊り狂う霧雨が見えるばかりであった。

「これだけなら、居眠り運転かなんかで終了だったんだがなあ」

警部はぼやかずにいられなかった。刑事は立場上、同調するわけにもいかないで、改めて事件を整理することにした。もつとも、この事件に整理など無意味な行為なのかもしれないが。

「この謎の電車を皮切りに、その夜未明から明け方四時ごろにかけて、萩野市民のほぼ全員が、何らかの怪奇に見舞われることになりました」

警部は手を伸ばし、山の中から適当に二、三枚の書類をひつつかんだ。くたびれた声で文面を読み上げていく。

「二丁目の夫婦の家に、どこからかいくつもの石ころが投げ込まれた。その隣の家の子どもは、夜中にいきなり起き上がって生魚にかぶりついた。三丁目の住民は全員、竹を切り倒すような音を聞いているし、本町の連中に至っては、白い象に乗った仏様を見たとか何とか……」

「二丁目の老人が布を叩くような怪音を聞いたと通報してきています。萩野アパートでは大量の陶器の破片が発見されました。監視カメラの映像を見ると、奇妙な影のようなものが破片を投棄したとしか思えません。さらに商社勤めの会社員が、帰宅中に大きなしきりに道を遮られたり、目鼻のない化け物に遭遇したという通報もあります」

刑事は新しく通報された怪奇現象を警部に報告していく。

「おい長野。その化け物つてのは、要するにのっぺらぼうだろ」

「……はい。おそろく」

刑事が不承不承うなずく。それを見て、警部は苦笑いを浮かべた。

「認めたくないのも分かるが、あきらめろ。この世の中にはな、俺たちに解決できない事件が、それこそ山のようにあるんだからな」

その言葉に、いかにも納得いかない様子の刑事。警部は話題を変えることにした。

「それより、あつちの事件はどうなってる？ 竹やぶで見つかった男の変死体――」

刑事は立ちあがると、壁際のロッカーから一冊のファイルを取り出した。それを机の上に置き、ページをくつつていく。

「六月二十七日の朝に発見された変死体ですが、名前は松田栄二朗。死亡推定時刻は二十六日の未明から翌日の午前四時ごろまでです。検

視の結果、彼は末期の胃癌を患っていたことが判明しました。主治医の確認も取れています。ずいぶんと酒を飲んでいたので、病状はいつ死んでもおかしくないほど悪かったそうです」

刑事はそこで報告を中断した。警部が手をあげて遮ったからだ。

「その男はどうして、そんなに悪くなるまで酒を飲んでたんだ？」

その質問を受け、刑事はファイルのあるページを開く。

「どうやら癌のことを知り、自暴自棄になったようです。この男は人との交流が少なかったので、調査に苦労しました。数少ない知人の言によると、俺は死んでも仕方がない、という趣旨の発言をしていたようです」

「死んでも仕方がない、か」

警部は窓の外を見やった。空は相変わらず雨雲に覆われ、ジトジト

とした陰気な雨が街並みをくすんだ色合いに変えてしまっている。

「さらに男は、弁護士という職業にも嫌気がさしていたようです。これには男の幼年期が反映されているようですが——」

いったん言葉を切る刑事。

「男は四国の山村出身ですが、両親を早くに亡くしています。残された遺産は、貪欲な親族によってほとんどかすめ取られてしまい、苦労が多かったようです。男はわずかな財を持って上京。大学で法関係の勉強をし、弁護士になりました」

警部はしばらくジツと窓の外を見つめていたが、やがてボソリとつぶやいた。

「……親族を見返してやりたかったんだらうな」

警部がこぼした思いつきのような言葉。それに対して、刑事は生返事をするこゝろできない。

「しかし、弁護士というのは、当たり前だが弁護するのが仕事だ。それは例え善人であろうと悪人であろうと、な。だから嫌気もさしたんだらう」

刑事はあいまいにうなずいた。そしてまた、ファイルのページをめくる作業に戻る。そんな部下の姿を見つめる警部。

「このような状況から、他殺の可能性は極めて低いと思われまゝ。実際、外傷もありません。ただし、腑に落ちない点もあります」

刑事が指を一本立てる。

「死体がなぜ竹やぶの中にあつたのかです。男とこの竹やぶには全く接点がありませんでした。酩酊したあげく野たれ死にしてみましたとも考えられますが、死体はそれでは説明のつかない状況におかれています」

刑事は一枚の写真を取り出して、警部に渡した。それは発見時の死体を撮影したものだ。

男はおお向けに寝かされ、その上から木の葉をかぶせられていた。

それはちようど、あたたかな布団をかぶせられたように——。

「これに関しては、まだ詳細不明です。何かお伝えするようなことが見つかりましたら、すぐにご報告申し上げます」

刑事はそう締めくくり、報告を終えた。警部は立ちあがると、実直な部下の肩を力強く叩く。

「お前は真面目な奴だな。しっかりとしている。仕事についても有能だ。だが、これだけは気をつける」

警部の目が、若い刑事をとらえた。しばしの沈黙。警部はフツとほを緩めて、こう言った。

「現実ばかり見ると、そのうち息が詰まって死んじまうぞ」

ジトジトした雨の中を、警部はゆつくりと歩いている。

刑事からの報告を受けた後、警部は〈萩野市集団幻覚事件〉の聞き込み調査を行うために、警察署を後にしたのだ。

警部の頭の中では、ある考えが浮かんでは消えを繰り返している。それは、〈萩野市集団幻覚事件〉と竹やぶの変死体——松田栄二郎との関係について。

男と幻覚事件との間に、奇妙な符合があることを警部は見抜いていた。

つまり、男の死亡推定時刻と幻覚事件の発生時間が、完璧に一致するのだ。

これは果たして偶然なのだろうか。もし仮に必然の一致だった場合、いったいどのような意味を持つのだろうか。

だがしかし、それ以上の繋がりを見つけることはできない。ただ警部の長年の勘が、なぜかこの二つの事件を結び付けて考えようとするのだ。

いや、考えすぎだろう。

警部は首を横に振って、自らの考えを否定する。

あの男は何も悪いことをしてこなかった。幼いころに貪欲な親族によつて苦しめられ、それでも必死に学業にはげんだ男。弁護士になれば、親族を見返すことができると思つていたのかもしれない。だが、男の仕事は他ならぬ親族の同類を助けることにも繋がつていたので。今の世の中は、それこそ化かし合ひの世の中だ。男はその争ひの片棒を、自ら担いでしまったのだ。

それを見ると、警部は松田栄二朗に同情せずにはいられなかった。目的地に到着する。警部は気だるそうに首を動かし、萩野アパートを見上げてみた。冷え冷えとしたコンクリートの塊は、灰色の霧雨に覆われて、ひどくにじんでしまつてゐる。

俺は卑怯な親族とは違ふ、と男は自分自身に呼びかけ続けていたに違ひない。だが結局、男が自ら選んだ道は、他ならぬ化かし合ひの道であつたのだ。

その事実には気付いた時、男は何を思つたのだろうか。そして、死の間際に、男は世の中に対して何をしようと思つたのだろうか。

灰色の塊の中に足を踏み込む。至る所に散らばつたかわらけの欠片。それらは蛍光灯の白々しい光を反射して、必死に輝こうとしているように見える。

警部は、思つた。

そういう奴こそ、せめて最期ぐらい、人を化かしてやろうと思ふのかもしれないな――

サヨナラオバケ

高橋 輝人

『同窓会のお知らせ』

そんな風に書かれた便りが届いた。そこに書かれていた内容によると、会場は学校らしい。

ちようど、受験が終わり、大学生活へ向けての準備を始めていた頃だった。こういうものは、もつと歳を食ってからするものではないかと思つたが、気持ちはわからないでもない。大学に進学してしまえば、誰も彼もてんでばらばらの進路を取つて、連絡などつかなくつてしまふだろうから。

特に楽しそうだな、とも、なつかしいな、とも思わなかつた。だが、大学生活への準備などといつておきながら、どうせそれ以外は家で寝てばかりいるのだ。暇なので行つてみることにした。

会場についてみると、予想はしていたが、ほとんど人は集まつていなかった。暇じゃないのか、ただ単に面倒なのか、それともそもそも同窓会そのものを嫌悪しているのかはわからないが。

ざつと見合わせたものの、誰が誰だかわからない。とりあえず、周りの会話から少し離れた所に立つていた女に声をかける。理由は単純で、そいつがすごく可愛い女だつたからだ。名前を言つて、他愛のない会話をして、いい雰囲気になつて、恋が始まる……というわけにはいかないだろう。どうせ、すぐに俺たちは全国の都道府県にばらばらに散らばつてしまうのだ。

しかし、こちら予想に反して、俺の名前を聞くと、そいつはぱつと顔を輝かせた。親しげな口調で言う。

「わあ、ちび助久しぶり！」

ちび助。

今でこそ長身の俺だが、小学生の頃は身長が女子よりも低かつたの

だ。それは小学生の俺のコンプレックスになつていて、だから俺のことをちびと言つた奴らには食つて掛かつていた。だからまあ、俺よりもいくらか大人だつたクラスの連中は俺の前でちびは禁句ということにしていただつた。

それを破つて、俺のことを「ちび助」と言つていた奴はひとりしかいない。

「お前、岡本か」

「何？ 私だつてわかんなかつたの？ ひっどーい」

けらけらと笑う岡本を、俺は信じられない気持ちで見た。小学生の頃は別人のように綺麗になつていたからだ。昔の岡本は、なんとうか、日本史の教科書で見かける昔の女学生のような女子だつた。

「まじかよ。何でお前、そんなに可愛くなつてんだよ」

「それはこつちの台詞よ。ちび助も、なんでそんなにでつくなつてんの？ ちび助のくせに」

「中学で陸上始めてから一気に伸びた」

「なんかむかつくなあ」

気持ちはよくわかる。俺も同じ気分だ。まったく、人間どうなるかわからない。

と、そこで、俺は一つ気になつたことを尋ねた。

「お前、今でも幽霊とかUFOとか追つかけてんのか？」

小学校時代、「オカルトの岡本」と呼ばれていたくらい、こいつは心靈スポットだの宇宙人だの超能力だの未確認生物だのに精通していた。小学校では、そういったものに興味を持つている奴は少なくなかつたが、その中でもこいつは飛び抜けてそういつたことに興味を持っていた。こいつと仲がよかつた俺は、毎回毎回こいつの行動に付き合はされることとなつた。今となつては懐かしい思い出だが、当時は心底うんざりさせられたものだ。

まさか、この年になつて、未だにそんなもの信じてるんじゃないか

ろうな、と心配になった。

しかし、こちらの心配を余所に岡本は、けらけらとおかしそうに笑う。

「馬鹿ね。この年になって、そんなもん信じてるわけないでしょうが」
全くその通りだった。俺は少し安心した。

特に親しい知り合いもないようだったし、俺たちはそのまま昔話に花を咲かせた。

そして、ふとした拍子に、学校で噂になっていた怪談を調べようとして、夜中の学校に忍び込んだときの話になった。

「あの時、俺は嫌だって言ったのに、無理矢理連れ出されたんだよな」
「だって怖かったんだもん」

「なら、行かなけりやよかつただろうが」
「それはそうだけども、そんなもんでしょ、みんな」
確かに、と俺は笑った。つられるようにして岡本も笑った。

それから、ふと思いついたように岡本は言う。
「ねえ、せっかくだし、今から学校回ってみない」

「はあ？」

「大丈夫、別に二人くらい居なくなつたつてはれたりしないって」
「いや、まあ、そうだけども」

人気がない真つ暗な校舎の中を、今では随分と女らしくなった岡本と一緒に歩くことを想像する。

「あ、今変なこと考えたでしょ。ちび助、えっちー」
張り倒すぞ、と俺は言った。凶星だったからだ。

「まあ、それはいいとして。別にいいでしょ？ 同窓会なんてそんなに楽しいわけでもないし」

ならなんでお前はここに来てるんだよ、と言いたかったが、きつと理由は俺と同じただの暇つぶしだろうから黙っておく。
「じゃ、れつつこー」

そう言うって、彼女は当然のごとく俺の手を取った。あまりに自然に掴まれたので、一瞬理解が遅れたが、理解したら理解したで驚くはめになった。こちらが驚いている内に、やけに強い力で引つ張られ、ぐいぐいと岡本は校舎探索を開始した。俺は洪々といった感じで、それに付き合ふことにした。ため息をつきながら、考えて見れば、昔もこんな感じだったな、と思った。

しばらく歩いてみて思ったのは、小さいな、と言うことだった。夜の校舎が、ちっぽけでみすばらしいものに感じられた。

子供の頃は、もともっと夜の校舎は広く、そして、ずっと不気味に感じられた。柱の陰には、何かがいるように思えたし、ちよつとした物音でも飛び上がるように驚いた。夜の学校は、そんな未知の空間で、ちび助とオカルトの岡本は手を繋ぎ合つて恐る恐る歩いた。

今にも動き出しそうな人体模型があつた理科室。花子さんが出ると噂されていた女子トイレ。目が光る音楽室のペーターヴェン。数が増える階段。その踊り場の鏡は、四時四十四分四十四秒に見るとあつちの世界に連れて行かれると言われていた。近づいたものを食べてしま

うモノリザ。自殺した女の子の幽霊が出てくる屋上。校庭の二宮金次郎は本のページがめくられていたり、薪の数が増えていたりする。

それは、子供だった俺たちからしてみれば、本当に大冒険だった。そんないろいろな場所を、俺たちは、昔と同じように手を繋いで見ていった。岡本はなつかしいなつかしいと連呼していたが、俺からして見れば、岡本と手を繋いでいることの方がよっぽど気になっていた。

「なあ、なんで手を繋ぐんだ？」
「だって、怖いじゃん」
「嘘つけ」

でも、こうしてるとき、昔に戻つた気にならない？」

確かに、それはそうだった。昔と同じように、彼女に無理矢理に手を引かれて、歩いて行くと、なつかしい気分になるように感じられた。

でも、だからこそ、変わってしまったものが余計に目に付いた。

理科室のリアルでグロテスクな人体模型はどういうわけかチープな標本に変わっていたし、三番目が封鎖されていた女子トイレは新築されていた。退色したベートヴェンはひどくみすぼらしく見えた。段数が増える階段は、踊り場を数えるか数えないかの違いだ。その踊り場の鏡は、誰かのいたずらのせいなのか隅の方が割れていて、ガムテープが貼られていた。モナリザは当たり障りのない風景画に変えられ、屋上へと続く扉には木の板が釘で打ち付けてあった。俺たちが卒業してから、この校舎も随分と変わってしまったのだ。そして、何よりも、俺たちが変わってしまった。

今の俺たちにとつて、校舎は随分と狭く感じられた。さほどの時間もかけずに学校を巡り、それから、校庭に出てみた。そこにあつたはずの二宮金次郎は薪の一本すら残さず消えていた。

満月でも三日月でも新月でもない中途半端な月が、誰もいない校庭を照らしていた。ようやく俺の手を放した岡本は、校庭の端の方に寄せて置いてある遊具の集まりに近づいて行って、その中のブランコに乗った。それから、きこきこ、とそれを漕ぎ始めた。俺は特に何も言わずに、それを見ていた。

ブランコを漕ぎながら、岡本が言う。

「そういえばさ、昔、この校庭でオバケが走り回っていたのを何人かの生徒が見たっていつて大騒ぎになったよね」

「ああ、あつたな。そんなこと」

そして、その日、ちょうど風邪で学校を休んでいた岡本は端から見てもひどくがっかりしていた。

「あれって、本当だったのかな」

「まさか」

「だよねえ」

岡本はけらけらと笑った。

「オバケなんて、いるわけないよねえ」

笑って、そう言った。当然のごとく。

その時、ふと実感した。

ああ、もう、オカルトの岡本呼ばれていたあの頃の彼女はいいんだな、と。

ちび助と言われていた俺が、もう、どこにもいないように。

頭ではわかっていただけだったが。

やっぱり、実感するのは違う。

「ちび助」

「ん？」

「大学行くのって、不安じゃない？ 知らない街で暮らしていけるのかとか、一人暮らしできるのかとか、そんな感じの」

「そりゃあ、まったく不安がないって言ったら嘘になるよな」

でも、と付け加える。

「でも、実際行ってみれば、俺たちが思ってるほど大したものじゃないと思うぜ。すぐ慣れるさ」

「かもね。でも、やっぱり怖いな。だつてさ、大学生ってやっぱり何か、高校生までとは違うじゃない。大人っていうかさ」

「そりゃ、いつまでも、子供のまじやいられないだろ」

「うん。そうだけど……ううん、そうだよ。もう、私たち小学生じゃないもんね。あの頃とは違うもんね。子供じゃないんだもんね」

そう言って、彼女はブランコから降りた。乗り手を失って、ブランコの揺れは急激に勢いをなくした。

岡本は携帯電話を取りだして、時間を確認する。俺もそれに習って確認した。そろそろ同窓会もお開きになる時間だった。

帰るか、と俺が言うと、岡本も帰ろう、とうなずいた。

校庭から校舎へと戻るとき、岡本は、一人言のようにつぶやいた。

さよなら。

オカルト好きだった自分に対してか、ちび助に対してか、それともただ単純に、学校に潜んでいると俺たちが本気で信じていたオバケたちに対してか。

それは俺にはわからなかったけれど、多分、岡本にもよくわかっていなかっただろうと思う。

けれども、そのとき、校舎の中から何かが飛び出していった。姿も見えなかったし、足音が聞こえたわけでもなかったけれど、確かに、何かが俺と岡本の間を通り抜けていった。そして、そいつは、そのときに、はっきりと聞こえる声でこう言ったのだ。

さよなら。

俺と岡本は、とっさに振り返ってそいつを確かめようと思ったけれど、そいつの気配は完全になくなっていった。跡形も無かった。何となく、そいつには、俺たちはもう二度と会えないのだと理解できていた。

呆然と突っ立ったままの俺の隣で、岡本はなんだか泣きそうな顔をしていた。けれども、泣き出すことはせずに、校庭に背を向け、校舎の中へと戻っていった。

一人になった俺は、しばしそのまま立ちつくして、誰もいない校庭を眺めていた。

岡本が乗っていたブランコだけが、まだ、わずかに動いていた。けれども、さほど時間もかけずにそれも止まった。止まって、二度と動かなかった。

等身大の自分

齊藤 和六

やつと一段落ついた。

オフィスの壁時計を眺めると、針は既に二時を過ぎていた。夕食のために休憩を挟んだりもしたが、およそ六時間以上も残業をしていたことになる。他の誰のせいでもなく、自らのミスで発生してしまった残業だ。自業自得だが、流石にくたびれた。

一服しようとデスクから立ち上がる。この嫌煙全盛時代、うちの会社のオフィスもご多分に漏れず禁煙になっていたが、どうせ今この場にいるのは自分だけだ。守衛も零時過ぎに一度見回りに来ただけ。あまり臭いの残らないように、換気しながら吸えば問題はあまるまい。

そう考え、灰皿代わりのコーヒーマシンの空き缶を片手に窓を開けた。普段だったら、隣のビルの壁を映すはずの私の目に飛び込んできたのは、白い布のようなものだった。

麻か絹かキャンバスか——素材は何とも知れないが、夜の闇の中でぼんやりと浮かび上がる真白のその布は、窓から身を乗り出して見渡してみただころどうやらビルのこちら側をほぼ覆い尽くしているようだった。

——何か改装工事でもしているのだろうか——

ふとそんな考えも浮かんだが、工事の話などどこも暫く聞いていない。十階建てのビルの上方を眺めてみるが、この布の理由を示してくれるようなものは何も見えない。

——屋上に行ってみようか——

このビルはオフィス内が禁煙なので、屋上が喫煙場として何時でも開放されている。布の正体は掴めないが、それが吊り下げられているとすれば屋上近くからだろう。深夜の好奇心と仕事から解放された興奮に引きずられ、私は仕事場を離れて上へと向かった。

灰色のコンクリートの上、所々に置かれた銀色の灰皿がぼんやりとした月の光を反射して尖らせる。

なかなか詩的な風景の屋上で私が見たのは、白い布のことなど一瞬忘れてしまうほどのものだった。

それは、でかい顔だった。

直径三メートルはあろうかという巨大な若い男の顔が、屋上の周りに沿って張り巡らされた金網の向こう側でこちらを見ていた。

「こんばんは」

中華鍋のように大きく黒いその目と視線が合った瞬間、巨大な顔が話しかけてきた。

「……こんばんは」

死んだ振りなどした方がいいのかも知れん——あつげにとられながらもそんなことを考えていた私だったが、「彼」が発した存外に落ち着いた声を聞いて思わず言葉返してしまふ。

「……いい夜ですね」

「……そうだね」

「…………」

しばらくの間沈黙が続く。深夜のオフィス街で響く僅かな雑音さえ、ここ地上十階までは届かない。静かな時間の中で、私はゆっくりと落ち着きを取り戻していった。それを見計らったかのように彼が喋り出した。

「実は僕、幽霊なんですよ」

「幽霊？ ああ……番町皿屋敷とかの？」

「ええ、お菊さんとかの、その幽霊です」

近付いて、金網越しに彼の首から下——ビルの下の方に伸びているその体を確認してみる。どうやら私がオフィスの窓から眺めていたの

は彼が身に纏っている白い死に装束だったようだ。成程、言われてみれば月明かりの下でもわかるほど血の気の無い青白い顔に、ぼさぼさの髪。子供の頃に絵本で読んだ「幽霊」に見えなくもない。しかし――

「君、身長何メートルあるんだ？」

十階建てのビルと同じくらい巨大な幽霊なんてのは、聞いたことがない。

「まあ多分……二十五メートルぐらいですかね？」

「幽霊ってことは君……生きてたときから、その、そんな大ききだったのかい？ いや、まさかとは思うが」

「ええ、むしろ身長は平均より低い方でしたよ。昔はそのせいでからかわれたりもしましたし……」

巨大だが人の良きそうな彼の頬笑みに、私はすっかり心を許してしまっただけだ。

「本当に幽霊がいたってことは勿論驚きだが、君のような巨大な幽霊もいるってことがさらにびっくりだな。興味が湧いてきた、君の話を詳しく聴かせてくれないか」

「わかりました。丁度僕も話し相手が欲しかったところですから――僕が死んだのは、一ヶ月ぐらい前の日曜日です。昼寝をしていたら急に胸が痛くなりまして、そのままころっと死んでしまいました。享年二十四歳です」

急性心不全という奴だろうか。この間見たテレビによると、最近若者でも急死する人が増えてきたらしい。

「不健康な生活をしてましたから。会う人会う人に顔色が悪いって言われてました」

顔の青白さは幽霊だから、という理由だけではないのだろう。

「やはり人間は野菜を食わなきゃいかんよ」

自分の死んだ話をあつけらかんと話す彼につられて、つつい私も

軽口を叩く。

「まったくですね……僕もう幽霊ですけどね……。で、自室の布団の中でちよつと苦しんで、気付いたら変な洞窟の中にいたんですよ」

「洞窟？」

「あれが死後の世界って奴なんでしょうね。その洞窟の中を恐る恐る進んでいくと三叉路につきあたりました。そして、頭の中に声が響くんです。『右は極楽左は地獄、道を戻れば幽霊になって現世を彷徨えるが、どうする？』って」

「閻魔様の声って訳かい。にしてはえらく軽い雰囲気だね」

「僕は右に行きたいって答えましたよ。当然ですよ。そしたら『お前は現世で徳を積んでないから駄目だ』って言うんです。じゃあ地獄行きなのか、って悲しくなったら『でも地獄へ行くほど悪人でもないな』ですって」

「本当に軽いなだねえ」

合槌を打ちながら、そういうえは煙草を吸っていないことを思い出し、ずっと右手に持ったままだった紙巻きに火をつける。仕草で彼にも勧めるが、首を振られてしまった。

「すいません、煙草吸わないんですよ。なんたつて健康に悪いですし……冗談ですよ？ 面白くなかったですか。すいません。話戻します。

それでですね、じゃあどうすればいいのかって聞いたら『幽霊になって悪人を脅かして改心させてこい。とりあえず十人改心させたら極楽行けるから』と」

「へえ。面白いねえ。極楽ってそんなシステムだったのか」

「どうにも適当な感じでしたけど。で、わかりましたって言ったら白い光に包まれて、次の瞬間にはもうこの格好この体格で高尾山の頂上にいました」

「光に包まれた瞬間に体が大きくなったってことかい？」

「ですね。多分、あの閻魔様のミスですよ。光に包まれた瞬間に『や

「べ、ミスった」って聞こえましたし……」

随分と荒唐無稽な話だが、その証拠が目の前にいるのだ。信じないわけにはいきまい。

「大変だねえ。それで悪人を十人脅かすっていうのは……」

「そうなんです。お気づきでしょうけど、これだけ体が大きいとなかなか『幽霊』としては怖がってもらえないんですよ」

「だろうねえ」

確かに実際、私が彼を目の当たりにしたときに感じた恐怖心はさきやかなものだったし、それも象などの巨大な生物に対して抱くものと同じだった。言葉の通じる巨大生物——恐怖の対象どころか、子供の憧れの的だろう。

「そうなんです」

電柱のような太さの指を私に突きつけ、悲しそうに続ける。

「例えば、夜道で人を後ろから脅かそうとしますよね。——人通りの少ない道を通って帰宅していると、どうも誰かが後ろから付いてきている……そんな気配を感じる。で、ぱつと振り向く！　そこでまず目に映るのが、白い大きな布ですからね。『え？』って、きよとーんとした顔を何回もされました。酔っ払いの酷い人だと、飲み屋の暖簾かなんかだと勘違いしたのか僕の着物の前を掻き分けて、股の間に入ってきたこともありますよ。こっちがびっくりして退散しました」

私は他人事だからと半ば笑って聞いていられるが、やはり彼にとっでは深刻な問題なのだろう。

「同情するよ」

「ええ……ありがとうございます、ありがとうございます。そんなふうに普通にやっけていても反応がいまいちなんで、とりあえず物真似を試してみようと考えまして」

「物真似って言うって？」

「有名な怪談とか都市伝説とか——そういうものに出てくる幽霊と

か妖怪の先輩方の怖がらせ方を真似してるんですよ。本当のことを言うと、今現在も進行中なんですけどね。何の真似をしているかわかりますか？」

少し恥ずかしそうに胸を張る彼の体を、もう一度見渡してみる。大きな体をうちの会社と隣のビルとの間に窮屈そうに滑り込ませているだけで、他に特に何かをしているというわけではなさそうだ。

「うむ……私はあまりそういう話に詳しくないから、わからないな。ビルの間の幽霊、みたいな有名な怪談話があるのかい？」

そう聞くと、彼はあつという間に泣きそうな顔になった。

「……………隙間の幽霊、つてあるじゃないですか」

ああ、それなら知っている。室内の家具——例えば箆筒と壁の僅かな隙間にいつの間にか幽霊が潜んで家主を観察している。そんな有名な話は、確かに聞いたことがある。しかし——

「……………ちよつと無理があるね」

彼が身を入れられる家具の隙間なんてものが無いのはわかるが、それにしたってビルとビルの間に大きい幽霊がいたところで、誰が「そういう恐怖」を抱いてくれるだろう。

「ですよね……今のところどれも似たような感じですから……結局人って等身大のモノにしか目が向かないんですよ。こんな体になって初めて気がつきましたよ。もうどうしたらいいか……」

彼の目がいよいよ潤んできた。

悩める若者を励ますのは年長者の務めだろう。

「元氣を出したまえよ、君。そうだ、一週間後のまたこの時間、もう一度ここで会おうじゃあないか。そのときまでに私もなんとか君が人を怖がらせる方法を考えてきてあげよう」

「本当ですか！　ありがとうございます。今日会ったばかりの人にこんな親切にしてもらえるなんて——」

正直に言うと、この幽霊の行く末に、さっきから好奇心が疼いてし

ようがないのだ。退屈な日常の中で、こんなエンターテイメントは中々ない。彼が喜んで、私も楽しい。一石二鳥だ。

「いいってことだよ。それじゃあ、君は今からどうする？　あまりその隙間幽霊に効果は無さそうだが」

「ええ、やめます。次は……そうですね、さつきも話した番町皿屋敷でもやってみますよ」

番町皿屋敷——それだつて隙間と同じで、彼の体に見合う井戸と皿はそう簡単に見つからないのではないかと。

「山奥の掘りかけのダムの中でそこら辺から持ってきたマンホールの蓋でも数えてみます！」

「よし！　頑張るんだぞ！」
だからそれで誰が怖がるというのか——言葉を飲み込んで、強く励ました。

「どうもありがとうございます！　ではまた一週間後に——」
昇り始めた朝日に霞んで消えていった彼は、幽霊とは思えないほど

に前向きな、良い笑顔をしていた。

私と彼以外の、その他大勢の人々にとってはいつも通りの朝が始まった。

一週間後。

約束の時間より少し前、私は屋上でそわそわしながら彼を待っていた。

いくつつか「これは！」というアイデアも考え付いた。彼の喜ぶ顔が待ち遠しい。一週間、久しぶりに充実した生活を送れた。仕事以外の楽しみを見つけただけで、全てが上手くいき出した。

——本当に、彼には感謝だな——
そろそろ時間だ。そう思う間もなく

「どうも、こんばんは」

と、待ち焦がれた声があった。

「こんばんは！　いい夜だね——」
返事をするが彼の姿が見当たらない。姿を隠しているのだろうか。

「おおい、私に見えるように現れてくれよ」
一週間前のように、金網の外に向かって声をかける。

「すいません、こっちはです」
予想に反して、声は私の背後から——つまり屋上のコンクリートの上から聞こえる。

あわてて振り返るが、誰もいない。

「どこにいるんだい。からかっているのか？　私は君のためにいくつもアイデアを考えてきたというのに、酷いじゃないか」

「ああすいません、からかっているわけじゃないんです。しかし言いにくいことなんです……実はあれから、また閻魔様の声が聞こえまして、今から等身大に戻してやる、と言われて、体が光に包まれたので喜んでいたので……また『やべ、ミスった』と——」

そこまで聞いて、私は虫メガネを探すために屋上からオフィスに駆け戻った。

バカは死んでも治らない

叶 仁六

親友が自殺した。

そのことを知ったのは、大学の夏季休暇が始まったばかりの頃、真昼間に掛かってきた母さんからの一本の電話だった。

「あかね、落ち着いて聞いてね……」

「なんだよ？」

「昨日の夜ね、幸希くんがね、亡くなったの」

「……………は？」

「自殺、だつて」

血の気が引くとは、たぶんこういうことを言うんだろう。ついさっきまで騒がしいと思うほどに聞こえていたテレビの音が、急に遠ざかる。エアコンの風が、やけに冷たく、寒い。

「自殺？ 誰が？ 何で？」

「本当に？ と震えたり掠れたりでぼろぼろになった声で尋ねる。返事が、答えだ。」

「それでね、新島さん……幸希くんのお母さんが、春斗に一回帰ってきてもらえないかって。大学で忙しいところ申し訳ないけど、どうしても渡したいものがあるからって」

母さんの声が、ぶれて聞こえる。何回か言い直してもらって、ようやく内容を飲み込んだ。

「わかった……明日、帰る」

おねがいね、と母さんは静かに言って、電話を切った。

幸希が、死んだ？ しかも自殺？

何で？ どうして？ どうして幸希が、死ぬんだ？

携帯を握ったまま、しばらく動くことができなかった。

*

俺は自殺した。

自殺しようとした、じゃない。ちゃんと死ねたはずだ。自分の部屋の天井に丈夫なフックを付けて、そこに輪のかたちに結んだロープを引っかけて、そして、首を吊った。

苦しかった。苦しくて苦しくて、だけどこのまま生きてるよりはずっと楽なはずで。そんなことを考えながらも俺の視界はだんだんと暗くなって行って、そして死んだ。

そう、死んだはずだ。

なのに自分に意識があると気づいたのはいつだっただろうか。

ふと気づいたとき、俺には視界があった。音もちゃんと聞こえた。だけど、声は出ない。どんなにがんばっても体は動こうとしない。視界にはうちのダイニングが映っている。あまりにも見慣れた部屋。でも、なんだろうこの違和感は。

——ああ、わかった。俺はダイニングを見下ろしているんだ。だから違和感があるんだ。

そう思い至ったとき、急に叫び声が聞こえた。まちがいない、母ちゃんの声だ。

なにがあつたんだろう？ と気になつてしようがないのに、体は動かない。どうしたの母ちゃん、と呼びかけたいのに、声を出すことができない。せめても思つて声が聞こえたほうに目を動かそうとして

も、俺の視界には変わらずダイニングが映し出されるだけ。

幸希、幸希！ と母ちゃんが俺を必死に呼ぶ声が聞こえてくる。なのに、俺はそれに応えることができない。

なんなんだ、これは。どうして体が動かないんだ。どうして声が出せないんだ。どうして眼を動かすことさえできないんだ。

母ちゃんが俺を呼んでいる。呼び続けている。

そんな状態がしばらく続いた後、いきなりインターホンが鳴った。さらにドアを叩く音が聞こえる。新島さん、新島さん、と若い感じの男の声がした。母ちゃんがダイニングを横切って玄関のほうへ走っていく。そして母ちゃんが引き連れてきたのは、二人組の白いヘルメットの救急隊員だった。

なんで？ なんで救急隊員が？ 誰かケガでもしたんだろうか。

——誰が？

俺だ。母ちゃんじゃないんだから、俺に決まってる。でもケガなんかじゃない。俺は首を吊って、死んだんだから。

母ちゃんが泣き叫ぶ声が聞こえた。

そうだ、死んだんだ。

じゃあ、こうしてダイニングを見ている俺は？

幸希、幸希！ つて叫んでる母ちゃんの声の聞いてる俺は？

なんで死んだはずなのに、俺には意識があるんだ。

動きたくても動く体が無く、しゃべりたくてもしゃべる口が無く。そのくせ見たくない映像を見せられても、目を閉じることもできない。聞きたくもない声に、耳をふさぐこともできない。

なんなんだ、なんなんだよこれはっ！

自殺した人間が天国に行くのか地獄に行くのか、そんなことに興味はなかった。そもそも天国も地獄もそんなに信じていなかった。だけど、もし俺が死んでもなお、ここから動けないんだとしたら。この光景を見続けて、この音を聞き続けるんだとしたら。それはまちがいに、地獄だ。

*

実家の最寄り駅に着いたのは、昼を少し過ぎた頃だった。

実のところ、俺が今一人暮らしをしている場所と、実家はそんなに離れていない。行こうと思えば、快速を乗り継いだって行けないことはないし、特急を使えばもっと速い。とは言っても、やっぱりそこから大学に通うには無理があるから、春から一人暮らしを始めた。実家には、お盆にでもちよろっと帰ればいいや、と思っていたから若干早い帰省となる。

とりあえず実家に顔を出すと、家には当然のように母さんしかいない。母さんは何やら忙しそうにしていた。聞けば、幸希の葬儀の手伝いをしてもらっているらしい。その話を聞いて、ああ、本当に死んだんだな、と改めて現実を突きつけられたように感じた。

早く顔を出してらっしゃい、と母さんに促され、俺は家を出た。とは言ったものの、正直どんな顔を出せばいいのかわからない。そもそも俺は、幸希の死に対してどういう風に思っているんだろうか。少なくとも、悲しくはない。じゃあ、何なんだ？

よくわからない。もしかしたら突然のこと過ぎて、また自分の中で受け止められていないのかもしれない。そうだ。きつとそうなんだろう。そうやって自分を誤魔化しながら、夏の日差しが照りつく中、幸希の家までのたった数十メートルのアスファルトを歩いた。

*

俺が死んでから、二日ほど経った。

あれから警察が来たり、葬儀屋が来たりしたけど、そのあいだずっと母ちゃんは泣いていた。そしてそれを、瞬きもできずに見続けている。俺。

監視カメラの映像のように固定された視界。目と耳だけが空中に浮いているんじゃないだろうかとも思ったんだけど、どうやらそういうわけでもないらしい。誰も、俺に気づかないから。

俺の死体は今ダイニングに移されて、顔に白い布をかぶせられている。こうして俺が俺自身を見るところが、こんなにも気持ちが悪いのだとは思わなかった。いや、違う。あれはもう俺じゃない。単なる、抜け殻だ。

そしてそんな抜け殻に、ずっと寄りそってる母ちゃん。たまに白い布をめくっては頬をなでている。——でもな、母ちゃん。それは俺じゃないんだよ。ただの抜け殻なんだ。だからそうやってなでてくれても、俺はもう何も感じないんだよ。ごめん。

母ちゃんは、体から水分がなくなっちゃうんじゃないかって心配になるほど、ずっと泣いていた。でも、しっかりと俺の葬儀の準備を進めてくれている。母ちゃんだけじゃない、実家とあまり仲がよくない母ちゃんが、唯一連絡を取り合ってた叔母さんが昨日から手伝いに来ていた。どうやら連夜をやる寺のほうに話をつけに行っているらしく、今はいない。他にも春斗ん家のおばちゃんが手伝ってくれている。

正直、やめてほしかった。

こんな形で死んだ俺に、そこまでやってくれなくていいんだ。さつさと燃やすなりなんなりして、適当に葬ってほしい。

だって、そうだろう？ 頭も全然よくなって、そのくせ努力もしなかったから、結局大学も地元にあつた誰でも入れるようなところで。大学に行ったところで特にやりたいことも無くて。将来なにがやりたいかわからない。毎日をムダに過ごしてた。なのに母ちゃんは、大学の学費を稼ぐために毎日朝から晩まで働いてて。こんだけ母ちゃん働いてんだからしっかりと勉強しなさいよ！ なんて冗談まじりに言ってたけど、俺はあいまいな返事しかできなかった。

俺は、ただの金食い虫なんだ。母ちゃんの、害虫なんだよ。どれだ

け母ちゃんが大切に育ててくれたところで、エサを食うだけ食ってなにもしやしない。ぶくぶく太って、どんどん醜くなるだけ。むかし母ちゃんから金をむしるだけむしりとして、あっさり事故で逝っちゃった俺の親父といっしょでさ。血は争えないよ、やっぱ。

だからさ、金はもう自分のためだけに使ってくれよ。俺はもう、いらないから。害虫は害虫らしく、ティッシュかなんかでくるんで、捨ててくれればいいんだって！ ただの害虫に、立派な葬儀なんていら

ないだろう？ 頼むから、もう俺なんかのために泣かないでくれよ！

どんなに叫ぼうとしたところで、俺にはもう叫ぶ口が無い。なんにもできない、幽霊モドキになっちゃった。害虫にはお似合いの末路なのか。

自殺の理由も、母ちゃんは知らない。遺書は遺したけど、生きることに疲れたとか適当なことを書いた。本当のことを書いたら、母ちゃんは自分を責めるかもしれないから。そうしなきゃいけない理由なんて、ひとつも無いのに。

だけど、俺は肝心なところで弱かったのかもしれない。自分勝手な話だけど、誰かに俺が自殺した理由を知っておいでほしかったんだ。だから遺書はもう一通書いた。

春斗宛に。

*

ドアの前に立って、ひとまず深呼吸をする。額の汗を袖で拭いて、インターホンを押した。キン、コン、と音が鳴り、続いて足音が聞こえてくる。

そしてドアを開けるのは、いつも幸希だった。

『よっ、やっとな来たか。アイス持ってきた？ おっ、ハーゲンちゃん！

太っ腹だなあ」

『うるせーバカ。とにかく暑いんだから早く中に入れる…おい、ストロベリーは俺のだぞ』

『わかってるって、俺は抹茶な…にしてもストロベリーなんて女みたいなもん好きだよな』

『高校生で抹茶をリクエストするお前もどうかと思うけどな』

『いーだろ、好きなんだから』

『俺だってストロベリーが好きなんだよ、せっかく買ってきてやったのにくぐだぐだ言ってるじゃねーよバカ』

ふと、他愛も無い幸希とのやり取りが蘇る。——そういえば、俺はアイツを名前で呼んだことがほとんど無かったな。おい、とかお前とか、後は…バカ。これが何だかんだで一番多かった気がする。

そんなことを考えていると、ガチャリと鍵を外す音が聞こえ、ゆっくりとドアが開いた。

「…あの…お久しぶりです」

「春斗くん…ありがとう、来てくれて」

少しだけ笑ったおぼさんの顔は、俺の記憶にあるものとは似ても似つかなかった。目は赤く充血し隈ができていた。顔の皺は前よりも深くなったように感じられ、髪の毛は艶がなく、ぼさぼさと広がっていた。俺が一人暮らしを始める前、三月の終わり頃に会った時よりも、明らかに老け込んでいる。人間短期間でここまで変われるのかと思うのと同時に、なんだか居た堪れなくなっておぼさんから視線を逸らした。

上がつてちようだい、と促され、靴を脱いで上がらせてもらう。他人の家だと必ず感じる、特有の匂いが無く、代わりに部屋に充満する練香の煙と匂い。この部屋からこんな匂いがあるなんて、絶対無いと思っていたのに。

そして足を踏み入れたダイニングに、アイツはいた。白い布団に白

いシーツを掛けられ、顔にもまた白い布を被せられている。

「幸希、春斗くんが来てくれたわよ」

おぼさんが白い膨らみに声を掛ける。その行為になんとも言えない嫌悪感を感じ、また目を逸らした。

「顔、見てやってちようだい」

布団の傍に膝を付いたおぼさんは、おもむろに幸希の顔を覆っている布に手を掛ける。俺も布団を挟んで腰を下ろした。そして布が捲り取られ——呼吸が止まった。

——誰だ？ コイツ。こんなヤツ、俺は知らない。

これが、幸希？ そんなはずがあるか。幸希はもつと肌が焼けてて張りがあつて、こんな青白い肌で頬はこけてなんかいなかった。髪だって、高校に入ってから色気づいて茶色く染めてたはずだ。なのに、黒く戻って白髪がちらほら目立っている。唇も血色を失い、青紫になっていた。以前の面影は、欠片も感じられない。

何も言えなかった。ただただ呆然として、様変わりした幸希の顔を見つめた。何だ、この感覚。すごく怖い。真夏の蒸し暑さなんて何処かに行つて、体の芯から寒気がする。死んだ奴の顔つて、こんなにも怖いものなのか。何よりも、これがあの幸希なんだつてことが、一番恐ろしかった。

春斗くん、と突然声を掛けられ、現実を引き戻された。体温が戻ってくる。遠のいていた蝉の声も、しっかりと鼓膜に届いた。でも、嫌な汗でシャツが体に張り付いている。

「これ、読んでやってくれるかしら…」

そう言つて、おぼさんが俺に渡した、白い封筒。ボールペンで『春斗』と書かれている。嫌な予感がした。

「これ…アイツの遺書ですか？」

「そう、私宛に一通と、春斗くん宛に一通
中は見えないから、と封筒を手渡される。ひどく、軽かった。

「きつと、春斗くんにしか言えないことがあるのね。あの子、あなたとすごく仲良かったし……」

「ごめんなさい、とおぼさんはハンカチを取り出し、目元を拭った。泣いている、あのおぼさんが、俺の知る限りでは気丈で、明るくて、アイツに似て少し騒がしいくらいだったあのおぼさんが。」

「俺、帰ります」

封筒をポケットに入れ、立ち上がる。見送りを断って、急いで玄関で靴を履く。断ったにも関わらず玄関先に立ったおぼさんに会釈し、ドアを閉めた。それからもう、汗が噴出すのにも構わずに、家に向かって一心不乱に走る。

一刻も早く、ここから離れたかった。

*

春斗が家に来た。

ひさしぶりに見たけど、全然変わっちゃいない。それが、なんとなくうれしい。でも、抜け殻の顔を見た春斗が肩を強ばらせたのを見て、そんな気持ちはどこかへ吹き飛んだ。

「そうだよな、俺はだいたい変わっちゃったよな。悪いな、ひさびさに会わず顔がそんな顔で。」

顔をのぞきこむ春斗の顔は、この角度からじゃ見えない。でもどんな顔をしているのかはだいたい予想がついた。きつとコイツのことだから、泣いたりなんかはしてないだろう。ガキのころから、人前で泣いたところなんて見たことがない。だからこういうときは決まって、無表情になるんだ。

「母ちゃんが春斗に声を掛ける。そうして上げられた春斗の顔は——青ざめていた。初めて見る春斗の表情に、俺は少なからず焦った。」

「——なんて顔してんだよ、おまえまで。」

母ちゃんが俺の遺書を春斗に渡し、また涙ぐむ。それをハンカチで拭くのを見て、春斗の顔はさらに青くなつたように思えた。何を思っただけで春斗がそんな表情を見せたのかはわからない。だけど俺は、そのとき確かに嫌な予感がした。

もしかして俺は、春斗に対してとんでもないことをしてしまったんじゃないだろうか。

春斗が、帰ります、と言って立ち上がる。ダイニングから出ていったことで、視界からはずれた。呼び止めようとしても、こんな幽霊モドキの状態じゃ叶わない。結局俺は見ていることしかできないのか。本気で自分が忌まわしく思える。しかし、そんなときだった。

あまりにも唐突に、視界が変わったのだ。なにが起ったのかわからなかった。けど、いままでダイニングに固定されていた視界が、いきなり玄関が変わっていた。ドアを閉めていきなり走り出した春斗を追うようにして、監視カメラの映像が切り替わるように視界が次々に切り替わる。

俺自身かなり困惑しながらも、俺の意思とは無関係に視界は春斗を追っていった。

*

家のドアを乱暴に閉め、自分の部屋がある二階まで階段を一気に駆け上がった。俺が置いていった、いくつかの家具があるだけの寂しい部屋。明かりも点けずに閉じこもり、荒くなつた息を必死で整え、額から流れ落ちる汗を袖で乱暴に拭う。

何で俺は逃げてきたんだろう。何をやってるんだ俺は。だけど、とにかくあの場所にいるのが嫌だった。幸希が死んだことでグチャグチャに壊れたあの場所が、おぞましかったんだ。

気が抜けて腰を下ろすと、後ろポケットに違和感を感じた。幸希の

遺書だ。震える手でポケットから取り出し、面に書かれた文字を見つめる。相変わらず、お世辞にも綺麗な字とは言えない。

これには一体何が書かれているんだろうか。俺にしか言えないことって、何だ？ 正直、あまり見たくない。あれ以上に恐ろしい何か書かれているんじゃないか、そう思うと到底封を開ける気にはなれない。

……でもきつと、俺はこれを見なきゃいけないんだろうな。それが、アイツが俺に最後に望んだことだから。俺はそれに応えてやらなくちゃならない。もう俺は、アイツに何もしてやることができないうんだけだ。

*

春斗が俺の遺書を読んでいる様子を、俺は春斗の部屋のドアの上辺りから見下ろしていた。

それにしても、なんで急に視界が動いたんだろうか。この三日間で初めてのことだ。いままでどんなに足掻こうとしても何ひとつ変わることはなかったのに。

そんなことを考えていたとき、唐突に、グシャリという音が聞こえた。春斗が、俺の遺書をグシャグシャに丸め始めたのだ。

なにしてんだよ、と声を掛けることは当然できない。丸めた遺書を右手で握り締め、高く振り上げる。目標は部屋の隅にあるゴミ箱だ。

そして一気に投げた。

さすがにそれは、あんまりじゃないか？

*

……ぶざげんな。バカだバカだとは思ってたけど、ここまでバカだ

つたとは。結局バカは死ぬまで治らなかつたってことか。

幸希の遺書には、簡単に言えば幸希が死ぬ直前に抱いていたであろう想いのようなものが書かれていた。金食い虫だとか、害虫がどうとか。挙句の果てには最低な父親と同じだの何だの。

バカじゃねーの。何が害虫だよ。バカのくせに背伸びして変な表現使つてんじゃねーよ。つまんねえんだよ！

本気で腹が立って、遺書をグシャグシャに丸めてやった。部屋の隅に未だに置いてあった空っぽのゴミ箱に向かって、思いっきりぶん投げる。

でも、結局入らなかつた。外したわけじゃない。強く投げすぎたせいでゴミ箱がバランスを崩して倒れ、一度は入った遺書も転がり出ってしまったのだ。なんだか虚しい気持ちになって、倒れたゴミ箱と丸まった遺書をぼーっと見つめる。

いや、もしかしたらアイツが自分の遺書を捨てられたことに腹を立てたのかもな。アイツなら絶対、幽霊になっても俺をビビらせようと色々やるはずだ。

『――でな、そしたら背後から……』

『止める、今すぐその口閉じねーと無理矢理黙らせんぞ』

『本当におまえってホラーとか怖い話とかそういう系苦手だよなあ、つてか今どき小学生でもビビんねーぞ、こんなの』

『うるせー、生理的に無理なもの一つや二つ、人間ならあるだろ』

『ふーん、おまえさ、ホラー映画の予告とかでも絶叫してるだろ、お

ばさんに聞いたぞ』

『ああしてるな、正直あんなのに金まで払うヤツの気が知れん、頭お

かしいだろ』

『へー、じゃあ夏によくやるバラエティの怪談特集とかは？』

『もしかかかってたら、即行チャンネルを変えるな』

『ぼー、――でな、そしたら背後から……』

『死ぬバカ』

——そんなバカなやり取りばっかしてたっけな。

丸まった遺書を拾って、倒れたゴミ箱を戻そうと縁を掴んだ。

その手に、ぼたりと水滴が落ちる。汗だ。汗が額から落ちたんだ。

そうやって自分を誤魔化そうとしても、次から次へと雫が落ちてくる。手の甲へ、ゴミ箱の中へ。

……情けないな、この年にもなって大の男が泣くなんて。

普段なら思い出すことなんてないアイツとのバカなやり取りが、こ

んなときに限って次々に浮かんでくる。本当にやることをバカ

なことばかりで、アイツにはいつも振り回されていた気がする。

でもさ、幸希。そんなお前のバカなところ、俺は嫌いじゃなかった。

これはこれで、コイツの良いところなんだろうなって思ってた。何

だかんだで、俺も一緒になってバカやってたしな。

——だけど、今回のこれはねえよ。お前のバカな行動で、どれだけ

周りが被害を受けたと思ってるんだ。おばさんの顔を見たか？ お前は

おさんにこれ以上迷惑かけたくないなんて言ってたけどな。そうやっ

てお前がやったことの結果があれだよ。あんなんになるくらいだった

ら、害虫に食われ続けてたほうがよっぽどマシだったって俺は思ってる

よ。そして何より、あの遺書だ。あんなの遺書されて、俺はどうしたら

いいんだよ。お前、俺のこと何だと思ってるんだ？ この先ずっと俺の心

の中に仕舞って置いといてよ。ふざけんなよ、バカ。……何であ

んなことになるまで、自分の中に溜めてたんだよ。電話の一本でもく

れば、お前のバカ話にも付き合ってたのに。

なあ、幸希。俺はお前が許せねえよ。どんなにお前が謝ったところ

で、俺はもう、お前のご許せそうにねえよ。

「ふ……ごげ……んなよ……バカ」

掠れた声が、口から漏れた。

*

投げた力が強すぎてゴミ箱が耐え切れなかったのか、それとも俺の
念が通じて心霊現象が起きたのか。どっちかはわからないけど、倒れ
たゴミ箱から俺の遺書が転がり出てきた。春斗はそれを見てしばらく
呆然としていたけど、おもむろに立ち上がって遺書を拾い、ゴミ箱を
掴む。

その動きは、急に止まった。このときほど、目を逸らせないことを
うらめしく思ったことはない。

春斗が、泣いていた。この光景だけは見たくなかった。でも、春斗
を泣かせたのは、俺だ。いつもどこか落ち着いて、なのに怪談とか

ホラーがすごい苦手で、俺のことをいつもバカバカ言ってたけど、で
もなんだかんだでこんなバカな俺に付き合ってくれた。そんな大事

な親友を、こんなにも崩したのは、俺だ。
勝手な都合であんな紙を押しつけて、アイツがどんなに苦しむかな
んて考えもしなかった。親友だつてことに、甘えてたんだな、俺は。

ふざけんなよバカ、と春斗が掠れた声でつぶやく。

うん、ごめん。たぶんどんなに謝ったところで許してくれないだろ
うけど。ごめん。本当に、ごめん、春斗。

*

『最後のお別れです』

葬儀屋の無機質なアナウンスが聞こえる。昨日の通夜にも、今日の
告別式にも、こうして顔を出したけど、いったい何度遺影に向かつて
焼香を投げつけてやろうと思っただかわからない。遺影は元氣な頃の写
真だから、尚更だ。棺桶に入ってるこの貧相な顔には、投げつけよう
なんて気にはなれない。

皆が、花を一輪ずつ幸希の顔の横に入れていく。俺もそつと花を添えた。相変わらずおぼさんは声を殺して泣いている。

——おい見てるかバカ。これがお前のかした結果だよ。これでもまだ自殺して良かったなんて思ってるようだったら、お前はもう取り返しつかないバカだから、俺は知らない。でも、もし少しでも悔してるようだったら、せいぜいこれ以上無いつて程に後悔しながらあの世に行け。もし俺がああ世に行つたとき、お前がまだ殊勝に後悔し続けてるようだったら、そのときは話を聞いてやるよ。許してはやらないけどな。

ゆつくりと、棺の蓋が閉められていく。それを何処か、冷めた目で見てる俺がいた。

結局、人間死んだらただの死体だ。生前に輝いていようが、くすんでいようが、自殺で死のうが、病死で死のうが、死ねばただの死体なのに、自らただの死体になつてるヤツがいる。それはそれで勝手だけど、でも周りには迷惑だ。死ぬんなら誰にも迷惑を掛けずに一人で勝手に死んでほしい。……果たしてそれが可能だろうか。

——絶対無理だな。

そんなことを考えながら、蓋が閉められていく様子を眺める。もう少しで完全に閉まる。そんなとき、その僅かな隙間から、俺は確かにそれを見た。

*

最後のお別れです。

どこから、そんな声が聞こえた。

気づけば俺は棺桶の中から外を見ていた。もう俺が死んでから何日経つたのか、まったくわからない。いつしか俺はむずかしいことが考えられなくなつていった。みんなが俺の顔の横に花を置いていくのを、

ぼーっと見ていた。

ああ、また母ちゃん泣いてるよ。本当にいいかげん泣くのはやめろよ。春斗のおぼちゃん本当にお世話になりました。あれ、おまえも来てくれたんだ、高校たのしかつたな。えーと、誰だっけ、とにかくありがとう。春斗……本当にごめんな。やつぱまだ怒ってるよな。ホント、ごめん。でも、ありがとう、お前が親友でよかった。

急に視界が暗くなる。ああ、蓋が閉められてるんだ。いや、違うな、蓋だけじゃない。視界も、閉じていつてる。なるほど、最後のお別れつていうのは本当だったんだな。生きてるやつにとつても、死んだやつにとつても。よかつた。やつと、やつとこれで辛いものを見なくて済む。

もうほんの少しになつた隙間から、春斗が見えた。どんな顔をしてるかはおぼからわからない。

……なあ、春斗。俺、もしかして生きてたほうがよかつたのかな。母ちゃんのこと、お前のことも、他にもこんなにもたくさんの人を悲しませて、なんかよっぽど悪いことしたみたいだ。

いや、それだけじゃない。今更になつて、もういつかい春斗や、母ちゃん、話がかつたつて思うんだよ。それがダメでも、せめて最後は、笑つた顔が見たかつた。それには、こんな死に方じゃダメだよなあ。こんなこと言つてももうおそいけど、もうすこしがんぼつてみてもよかつたのかもしれないなあ。

バカだなあ、俺。

*

「なに泣いてんだよ、バカ」

完全に閉まつた棺を見下ろして、俺は小さく舌打ちした。

今日も寝坊した。

朝起きて机の上に提出期限が数時間前のレポートがあったときは、一瞬だけ後悔の念が頭をよぎったが、結局は半分も終えずに諦めていたことを思い出したから問題はなかった。

十五分だけのはずだった二度寝は、気がつけば三十分となり、目を開けたところでまだ肌寒さの残る春の室温に立ち向かうことが出来るはずもなく、それは二度寝となった。その後も等間隔で震える携帯電話に気づきはするものの、薄手の羽毛から出ることがないまま二時間が過ぎた。

全く布団の魅力には勝てないな。ようやく目を覚ました時間は、既に大学の講義が終わる直前だった。始まる直前なら急いで準備もしただろう。お前は本当に俺を起す気があるかと携帯電話を睨みつける。携帯電話は何度も起こしたじゃないかと反論するかのように着信ランプを光らせていた。メガネを探しているうちに二度寝したのは誰だ、と。

着信は深瀬からだ。同じ学部で同じサークルなので一緒に行動することは多い。深瀬は律儀にも授業の始まりと終わり、次の授業の始まりにも電話をかけてくれていた。しかし、残念ながら俺はもう大学に行く気など全くと言っていいほどなかった。深瀬が受けてくれている授業なら遅刻してまで出ることもないだろうと、せっかくの友人の善意も空振りになってしまう。

それでも一応起きたことは知らせておこうと、着信履歴の一番上を選択して発信ボタンを押した。ボタンを押した回数は左と通話ボタンの二回か、こんな短い手順じゃあ何度掛けても番号は覚えそうにないな。

「お、名取。おはよう」

深瀬だ。布団で寝転ぶ俺の耳に明快な声が響き、目が冴える。俺もこれくらい明るい男だったら寝起きがいいのかな。

「おう、相変わらず元気だな」

「また寝過ごしたの？」ほとんど断定の疑問に聞こえる。「つかれてるんじゃない？」

「布団が気持ちよくてな。困ったもんだ」

「困るのはこっちだよ。もうノート見せないよ？」

「いや、それは本当に困る。でも、考えてみるよ。あの気持ちよさはおかしいだろ、人間に活動するなって言っているようなもんだ。働くなんてとんでもない、どうぞ布団でお眠りください、って」

「そうは言っても、働かなきゃ生きられないじゃん」

「生きるためには寝ることも絶対必要だろ。人間は頭がいいのか悪いのか分らないな。何もしなくても睡眠は絶対なのに、布団なんて道具を思いつく。気持ちよくなりすぎた。それに、生きるのに必要なのは全部気持ちいいじゃないか。寝ることも食うこともセックスも」

「気持ちよくないと絶滅しちゃうからね。頭いいんだよ」

「そうだな。確かに頭がいい」気持ちよすぎて他の事が出来なくなる。

「だから俺が眠るのは当然なんだ」

俺が中々回り始めない頭で考えた理論に、深瀬は感心したような呆れたような声を出し、それから何事も無いように話題を変えた。

「今日の待ち合わせは現地でもいい？」どうせもう大学に来ないでしょ、という皮肉が込められている気がする。俺ももう帰るけど、と深瀬は続けた。

「ああ俺も今から準備する」もう少し布団で温まってからにするか。

「流石に今から寝過ごすのはやめてね、名取」

……流石だな、深瀬。見透かしたような友人の忠告に、俺は布団を被りながら感嘆した。

家から電車で四十分ほど揺られ、そこから、見上げなくとも毒々しい色だと分かるほど輝いている広告が目につき、街全体で練り出す騒音が耳を通り鼻まで揺らす、流石に俺でも眠れないと参ってしまうような大通り抜けて、さらに三分ほど歩く。

そうしてたどり着いたのが、待ち合わせ場所の居酒屋だった。土地柄のせいなのかやはり静かで落ち着いたお店とは言えないが、俺たちはむしろその騒がしい雰囲気を楽しんでよく足を運んでいた。

深瀬は酒が好きだった。初めて会ったときは五分程度の会話で十分な生真面目さが伺えたが、初めての飲み会を終えたところで、その印象は間違っていた、人は酔うところも変わるものかと驚き、俺の人を見る目はたいしたものではないと気づかされた。

今日は深瀬の提案で二人で飲むということになっていた。こういう機会は結構ある。他の人に男二人で飲んで面白いのかと言われたこともあったが、そのときは逆に女がいれば楽しいのかと聞き返してやった。そりゃ楽しいだろ、と自信満々に言われたときは返事に困ったな。

「いたいた。今日は早いね、名取」

男二人のもう一人が俺を見つめ、小走りで見寄ってきた。

「ああ、俺も軽く手を振り、返事をする。」

深瀬は、はつきり言っただけで背が低く、童顔で、成年というよりは青年という言葉が似合う男だった。誰かに俺と同年だと紹介すると、名取って留年してたつけど聞かれてしまうこともあるほどだ。そのため深瀬は居酒屋に行くときはやけに大人びた服を着てくる。

実を言うとその服装は当の本人に全く似合っていないのだが、その点に深瀬が気づいているかは分からない。今日もワイシャツに黒い無地のジャケット、灰色でチェックのストラップという、深瀬なりの大人の服装で登場した。正直言っただけ俺の目に見てもセンスは悪くないが、

それは深瀬じゃなければの話だ。

「ごめんね、待った？ 服選ぶのに時間が掛かっちゃった」

「なに、今来たところだ」まるでデートの決まり文句だな、と我ながら思い、せつかくだから「似合ってるぞ」と嘘をついた。

男二人の飲み会はかれこれ十数回になるが、またまたお節介な人にそんなに話すことあるのかよと言われたこともある。

実のところ、俺と深瀬は飲んでいるときにあまり話をしなかった。深瀬は行き着けにしている理由でもある多様な種類の酒を楽しんでいるし、俺はといえば他人の話を盗み聞きするのが好きだった。趣味が悪いと深瀬に言われたときはどうにか反論しようとしたが、凶星でもあったため結局何も言い返せなかった。しかし、酒が好きなくせに一向に強くないお前に言われたくない、と出鱈目な文句を言うのと深瀬は思いのほかしよんぼりした顔になり、それ以上俺を責めることはなくなつた。その日、好きと強いは違うんだよと言いながら酔っていた深瀬は印象的だった。

居酒屋では面白い話が聞ける。誰かがトイレに行った途端に悪口を言い合う若者や、浮気で悩んでいることをまた違う男に相談する女、パチンコに嵌ってしまい夫に内緒で多額の借金をしたと洩らす中年のおばさんまで、様々だった。

リストラされたと話すおじさんの横で新人社員歓迎会の乾杯をしていたときは笑いそうになったが、留年した自分の横で進級祝いをされたら確かに腹が立つと思ひ、おじさんに同情したこともあった。

そんな中でも、女の子を落とそうと張り切るパーマの男はよく見かけた。中性的な顔立ちで、唇は薄く、鼻筋がまっすぐ、高い。目は初め一重だと思っていたが、深瀬が奥二重であることを発見した。毎回違う女の子を連れて来るか、一人で来ると必ず誰かに声をかけていたため、俺と深瀬はその男を容姿と違ってまるで猿のようだと話し、「パ

「パーマン」と呼ぶことに決めた。二号だ。

俺は女の子と話すならこんな大衆居酒屋じゃなく、もっと高級な雰囲気のあるバーに行くべきだと考えていたが、どうやら女の子の警戒を解くにはあまり高級すぎないほうがいらしい。女の子の警戒を解くのは俺じゃなくて周りの客だよ、とはパーマンの台詞だ。

パーマンは女の子と話すときは決まって怪談をした。口裂け女やテケテケ、懐かしいところでは紫鏡など、どちらかと言えば都市伝説に近い学校の怪談を好んで話していた。とはいえ本気で怖がる女の子は稀で、ほとんどは話の途中で鼻で笑っていた。しかし「そんな話が現実不起こるわけじゃないでしょ」と笑う女の子はたいい酔い潰れるまでパーマンと一緒に飲んでいたし、その女の子たちはパーマンに抱えられないが、俺たちにとってはそのことが十分に怪談だった。

「今日はあまり面白い話は聞けないな」

酔い始めた深瀬に声をかけてみる。今日は未成年のカップルが初々しい会話で盛り上がっていた。端々から十八歳、一年生、という単語が飛ぶが、聞こえないふりをするのが居酒屋のマナーなのだろう。誰も注意しようとせず、俺も特に話題にはしない。

「酒が旨いねえ、名取」

深瀬は大分早いペースで飲んでいるように思えたが、飲み干したジョッキはすぐに片付けられてしまうため何杯目なのかは分からなかった。「さつきパーマンのこと考えて、ふと思っただね」

「パーマン？ そういえば今日来てないみたいだね」

「ああ、あいつが女の子を連れて帰るのを、俺たちは怪談だって嘘してたぞ」

「怪談だねえ」

「そこで思っただね、怪談っていうのは怖い話じゃないのか？」

ふと出た疑問だった。俺は怖くない怪談を聞いたことがない。知っているのは汚い風呂を嘗めるだけという間抜けな妖怪「あかなめ」くらいだ。

「女の子からしたら怖いんじゃないの？」

「そういうけどさ、いくらその場のノリだからって、決断するのは女の子なんだし、もちろん自分だって気持ちいいわけでき。それを怖いなんていうのは、ちよっと違う気がする。自業自得だぞ」

「でも、怖いところはそこじゃなくて、連れて行かれる女の子がみんな言ってることだよ、そんな話は現実じゃ起こらない、って」

確かにパーマンの怪談に対してそう言った子は、ほとんどがパーマンに連れて行かれていりし、それが怖いというのも分かる。

「やっぱり怪談は怖いのか」

「そうだよ。気になるなら怖くない怪談でも探してみれば？」

深瀬がそう言ったところで、店の扉が開き軽快そうなパーマの男が入ってきた。

「パーマンだ」

「本当だ。噂をすれば、つてヤツだね」

パーマンは店に入るなり辺りを見回し、狙いを定めたのか先ほどの未成年と思しきカップルへ近づいていった。男がわからさまに警戒しながら「あんた何」と睨みつけたが、男が自分より年下だからか、パーマンは全く気にしていなかった。

「お嬢さん、足売りばあさんって知ってますか？」

今日は足売りばあさんか。足をもぎ取るか付け足すか、どっちにする迷惑な話だ。カップルの男はあからさまに不愉快な顔をしている。今すぐにもパーマンの足を取ってしまいたいような迫力だ。そして女の方はパーマンの話を通り聞き、言った。

「そんな話、現実には起こらないと思いますけど」

俺と深瀬は思わず顔を見合わせた。これは怪談の始まりか。

俺たちのパーマン観察は、深瀬が女の子より先に酔いつぶれたため中止となった。

ここから深瀬を送り返すのが残った俺の仕事だ。深瀬の家は俺と同じ路線で、しかも俺より大分前の駅だったため、帰る途中で済むこの仕事はそれほど苦ではなかった。

深瀬は酔って前後不覚なのか眠ってしまったのか良く分からない。深瀬を見ていると寝ると酔うのは同義なのかも知れない、と考えてしまう。そういえば酔って布団に入るといつも以上に気持ちよく眠れる。ああ、早く送って俺も寝よう。

困ったことに深瀬は時々目を覚ました。起きては寝て、また起きて寝る。何度も二度寝を繰り返す、俺の朝とそっくりだった。しかし、深瀬は俺とは違いすぐ夢の世界へと帰ろうとせず、一駅分くらいは起き続けて声をかけてきた。

「こまできたら朝まで飲もうよ」「飲み足りないよ」起きては酒にか触れない酔っ払いの言葉は、死んでも酒を求め続けてきそうに呆れた。「寝るくらいなら酒を飲むよ」

俺は酒が嫌いじゃないし、もちろん深瀬も嫌いじゃないが、このときはやはりあまりいい気はしなかった。深瀬が帰り際になると決まってしまう「寝るより酒を飲む」という言葉が気に入らない。

睡眠は立派な三大欲求のひとつだが、酒は違う。ただの欲求に勝てずに酒に溺れ自分を失うのはおろかな行為でしかないと思う。アルコール中毒は病気かもしれないが、深瀬は違う。ただ酒にとりつかれているんだ。

そのとき後ろから「お前こそ、つかれてないか」と声がした。気がした。幻聴にしてはやけにはつきりと聞こえたが、誰の声だ？ 深瀬か？ 少し考えたところで気づく。俺の声だ。すぐに「とりつかれてるって、どういふことだよ」と声をささずに歯向かったが、もうそれ

以降、俺から声は返って来なかった。

次の日も結局講義は寝過こした。

講義が控えている日に潰れるまで飲むなんてどうかしていると思われは自嘲していたが、俺には笑えなかった。講義をサボったことよりも妖怪、パーマンでなくあの声のことが頭から離れなかったからだ。

結局あのは深瀬を送り返してすぐに帰って寝た。深瀬は電車のドアが閉まる直前まで寝ていたのに対し、俺は電車の中では一睡もしなかった。そういえば俺は電車で寝たことが無い。電車で寝るくらいなら布団で寝たほうがいい、そう考えている。

しかし、この考えこそ俺がとりつかれている証拠じゃないか？ その疑問は何度も頭を駆け巡る。電車より布団、どっちも睡眠に変わりはないはずなのに。それから、もしかしたら深瀬の酒も三大欲求のひとつ、食欲の延長線上なのかも知れないとまで考えが及んだところで、呆然とする。俺と深瀬は何も変わらないじゃないか。

そして何より怖いのは、こう考えたのは完全に目が冴えてからで、起床予定時刻を三時間ほど過ぎてからになっていることだった。寝ている最中とはいえ、これ以上の樂園があったら教えてほしいと思うほどの、まさに至福そのもので、こんな気持ちのいい妖怪など存在しないはずだと確かに考えていた。だって、妖怪は怖いんたろ？

次の日は講義がひとつもない日だったが、急遽また深瀬と飲みに行くことになった。

俺は悩み続けているにもかかわらず不眠症になる心配など全く無く、むしろ集合時刻を寝過こして遅刻するくらいだった。

「これでこそ名取だね」「俺は遅れて到着するなり皮肉を言われた。遅刻が原因で彼女と別れるだけのことはある」
随分と昔のことを蒸し返すな、と思った。確かに俺は遅刻で恋人と

の関係が終わってしまったことがある。深瀬に酔って話したのはいいだろうか。

俺は昔からデートに遅刻することはよくあったが、ある日、二人で千葉に出かけようと決めた当日に夕方まで寝てしまったのは、ついに我慢の限界だったらしい。当時の恋人にはもう二度と眠れなくなるのではと思うほど強く叩かれ、それから一気に疎遠になってしまった。

そのときは確かに一人だけ夢の国に行っていたことを悪かったと反省していたし、別れたことも辛かったが、内心では、それでも布団に勝てないんだと開き直る自分もいたことが、それ以上に衝撃的だった。昔から寝過こしてばかりか、と息をつく。再び俺はとりつかれていてるのかも知れないという不安が頭に浮かぶが、何とか抑え付ける。

「何か考え事？ まだ眠いの？」深瀬が暢気に声をかけてきた。既にこの街のネオンとノイズで、すっかり目は覚めていた。

行き先はいつもの居酒屋だが、今日は俺たちより早くいたパーマンが、細く尖った知的なメガネを掛けた女の人に話かけていた。

「走る人体模型の話ですけど」

いつもどおりチープな学校の怪談を話し出すパーマンだったが、メガネさんは、内容を聞く前に口を開いていた。

「私も家に人体模型飼ってます」

メガネさんの「飼っている」という言葉が、買っている、なのか、勝手にいる、なのか区別は出来なかったが、とにかく予想外の答えだった。パーマンもカウンターの横においてある大きな達磨のように目を丸くしている。

「昔の型なんですけどね」メガネさんは構わず続けた。「結構速いんですよ」

確かに、人体模型に俺とパーマンの理解は追いつけなかった。「い、いいですよ、人体模型」

パーマンが慌てて返事をするが、もう願いが叶うことはなさそうだ。出鼻を挫かれるとはこのことを言うのだな、と慰めの視線を送る。パーマンは「今度競争させましょう」と意味不明な言葉を残し、その場を避けるように一人で飲み始めた。深瀬はそれを見て笑っているが、俺はそれを見て動いていた。

「あの」

俺はパーマンに声をかけた。深瀬は先ほどのパーマン顔負けに目を丸くしている。

「ええと、どちらさま？」

「こんばんは、名取といいます」

「はあ、どうも」パーマンは自分も名前で返事をしようとは考えなかったらしい。互いに常連なのでもしかしたら覚えられているかもという淡い期待は、期待のまま終わった。「何の用？」

当然の疑問に対し、俺は意を決してパーマンの顔を見た。俺より三センチは高い鼻が目がいった。

「あなた、つかれてますか？」

「はあ？」訳の分からない質問だ、といった顔をされる。俺だって分からない。「まあ、疲れてはいるが」

まともに会話が来ているという若干の安堵とともに、俺はそうですかと返事をし、なら今日くらい休んで、一緒に飲みましょうよと誘ってみた。パーマンは苦笑いを浮かべながらも「いいぜ」と返事をし、俺たちと合流した。深瀬は驚きのせいか手が止まっていたが、俺と目が合うと思いい出したように酒を飲み始めた。

パーマンの話聞くうちに、俺の想像は確信へと変わっていった。パーマンは自分がたかさんの女の子とお酒を飲む理由を、もはや癖のようなものだと言った。辞めるつもりは無いが、おそろく辞めたくなっても辞められないだろう、と。

俺の睡眠もそうだった。俺は自分の意志や状況と異なる睡眠を繰り返しているが、正直言って嫌ではない。むしろ心地いいと感じているのが本音だった。深瀬の酒もそうだ。昨日の今日で飲み会なんて珍しいと俺が言ったら、なぜか飲み足りないんだと話してきた。一昨日は吐くほど飲んだのに。

パーマンが女の子に怪談を話す理由は実に単純明快で、深瀬も少しは打ち解けたのかその理論には笑っていた。

「怪談で怖がる女はフィクションと現実の区別がついているんだ」とパーマンは言った。逆に怪談を笑う女は馬鹿だ。そんなの現実で起こらないと話す女は、俺が現実の話をしていると思ってるから救えない、だから騙される。パーマンは自信に満ちた顔でそう語った。「お化けは見えないから怖いんだ」

空想が現実であると思いつくのは恥ずかしい、とのことだったが、もしかしたら今の俺はそれに近いのでは、と動揺した。いや、現実を空想だと思いつくことのほうが間抜けだ。現に俺は何度も寝過しているのだと自分に言い聞かせるが、実に情けない証拠だと少し落ち込んだ。

話していると、パーマンの个性的だが端麗な顔つきは少なからず女性の目を惹いていることに気がついた。しかしパーマンは純粹に俺たちとの会話を楽しんでいるようで、一瞥もくれることはなかった。まるで憑き物が落ちたようだ。

そんなパーマンの様子と、一心不乱に酒を喰らい続ける深瀬の姿は対照的だった。深瀬は百メートル走を駆け抜ける選手のごとく速いペースで酒を飲み続ける。実際はフルマラソンだと誰も教えてあげないのは居酒屋のマナーなのだろうか。

深瀬が酒を飲まないときは真面目な学生そのものなところを思い返しても、やはり深瀬の妖怪は「酒」だ。それならパーマンにとつての妖怪は「女」で、俺の妖怪は「布団」で間違いない。それは誰かにと

つてはパチンコであり麻雀であり、もちろん「金」もそうだろう。

妖怪の正体は危険な存在でなく、「快樂」だ。酒を飲む快樂、女を抱く快樂、布団で眠る快樂。抗えない快樂の波に、人は押しつぶされる。

それなら、俺の快樂はもしかしたら最上の快樂ではないだろうか。酒は無くても生きていけるし、食事は点滴でいい。女を抱けないと嘆くなら、自分ですればいい。しかし、睡眠は代用品が存在しない、唯一無二の快樂だ。そうか、やっかいなものにとりつかれてしまった。抗おうと抗おうと、全く敵わないわけだ。

俺たちは、いや、誰でも何かしらの妖怪にとりつかれているのかも知れない。それなら俺たちの人生こそ「怪談」そのものだ。人生怪談なんだ、やっぱり怖くない怪談もあるじゃないか。

そうだ、ようやく謎が解け、気分が良くなったところで思いつく。

「今日くらいは頑張ってみるか」

急に呟いた俺を、パーマンが不思議そうに見つめてきた。深瀬はメニューを真剣に見つめている。

「今日は女を忘れて、男だけで飲み明かそうじゃないか」

パーマンに提案してみた。パーマンは携帯電話を確認して、辺りを一度見回してから、いいじゃないかと快諾した。予定もなければ、この誘い以上に魅力的なものもなかったのだろう。

「名取がそんなことを言うなんて珍しい」深瀬も驚いてはいたが、それよりも歓喜が大きいように見える。「よし、今日は潰れるまで飲みよう！」

予想通りに喜ぶ深瀬を見て、そういえばこのまま飲むと深瀬だけとりつかれているままだと気がついたが、考えるまでもなくそれは仕方ないと諦めた。むしろ今日は喜んで、明日の二日酔いで後悔してもらおう。それで気づけたら万歳じゃないか。

「ああ、今日は布団にも入らない」

力強くそうは言ったものの、もちろんずっと眠らないなんて不可能な話だし、布団で寝るのはやっぱり好きだ。明日には妖怪と共存する毎日、人生怪談に戻るだろう。それでもまあ、たまには反抗させてくれよ。別にいいだろう？ 今日だけ、な。

こんにちは、文藝 ajo です。今回の「怪談」をテーマにした冊子はいかがでしたか？

今回も新入生が頑張ってくれて、この冊子に載っている作品のほとんどが新入生のもとなっています。さらにコンペという形式をとったのもあって、今回の作品は前回のものと比べて万人向けにシフトしているようです。そのため、無料冊子にふさわしい、気軽に手にとれる冊子に仕上がったと思います。

この冊子には、私の作品は間に合わなかったのですが、それでもこうして皆で集まって冊子をつくるのは楽しいことです。皆様に読んでいただき、さらにお気に入りの作品の一つでも見つけて頂いたらその喜びも一潮です。

文藝 ajo は今年の白山祭にも参加予定です。そのときには本格的な冊子の販売と、なにか企画を行うつもりですので、興味のある方は是非とも一度ご来場下さい。部員一同お待ちしております。

会計 丹家加太男

文藝 ajo 2010夏冊子—怪談—

2010年7月9日発行

発行／文藝【ajo】

表紙デザイン／家草 溝道

編集／明神 明

印刷／東洋大学

Mail: bungei_ajo@hotmail.co.jp

HP(blog): <http://bungeiajo.blog14.fc2.com/>

Thanks For Reading !